

『中国の赤い星』 再読

石 川 禎 浩

は じ め に	1
I 『中国の赤い星』 英語版 <i>Red Star over China</i>	3
II 中国語版『西行漫記』 およびその他の節略版	12
III 日本語版『中国の赤い星』	22
IV ロシア語版『中国の赤い星』	28
V エドガー・スノーの取材——書かれざる人々	32
お わ り に——『赤い星』は毛沢東によって「検閲」 されていたという説について	41

は じ め に—————

エドガー・スノーの『中国の赤い星』(Edgar Snow, *Red Star over China*, 1937)は、言わずと知れた中国の革命と共産党に関する傑作ルポルタージュである。ジョン・リードの『世界をゆるがした十日間』(John Reed, *Ten Days That Shook the World*, 1919)と並ぶ革命ルポの双璧という評も、ほぼ定着していると言ってよかろう。この書によって初めて世界に知られた中国共産党首領たちの素顔と歴史、毛沢東自述や「長征」伝説、そして共産党根拠地に暮らす人々の生き生きとした姿は、同書の出版当時から大きな驚きをもって世界の読者に迎えられた。爾来、『中国の赤い星』は第一級の資料・古典であると同時に、スノー(1905–1972)の取材と同書の出版それ自体も、中国現代史上の一大事件であると評価されて、今日に至っている。

だが近年、この古典は中国でも外国でも、ほとんど読まれていないらしい。『中国の赤い星』を「古典」と呼んだフェアバンク(John K. Fairbank)は1961年に、同書の古典たるゆえんを、「毛沢東とその同志たちについて……初めて一貫した歴史を提供したばかりか、

ほとんど未知であったこの運動の将来の展望を予告」して、「それがおそろしいほどに的中した」こと、「つまり歴史の記録として、また一つの潮流を示唆するものとして、時の試練に耐えたこと」と説明している⁽¹⁾が、それからさらに半世紀ほどの間に、今度はその「運動の将来の展望」の「予告」や「示唆」が意味をなさなくなるほどに、毛沢東や中国共産党にたいするイメージや評価が激変してしまったのである。

いわば、戦後のある時期まで、「『赤い星』はいやしくもアジアに関心を寄せるほどの若者ならば、読まずに済ますことはできないバイブル的著作」であったが、毛沢東の死、文化大革命の終結、改革・開放時期と民主化運動の弾圧などを経て、1990年代以降の読者は「再び『赤い星』を読み返すと、当時にはなかった新たなこだわり」や疑念が自身の中に生まれていることに気づかされるに到ったのだった⁽²⁾。である以上、毛沢東や中国革命にそもそも関心のない、より若い世代が中国や世界に関する何らかの展望や示唆を期待して『赤い星』を読むことなど、ほぼあり得ないのだ。

だが、そうした書物の外界・後世への影響、評価や思い入れをいったん棚上げにした時、スノーの生前には明らかにされなかった取材する側、される側の事情を検証し、毛沢東や中国革命についてのイメージがどのようにして生まれたのかを探るという読み方も、その条件が整っている今ならできるのではないだろうか。つまり、中国現代史、中共党史、毛沢東伝にかんする一級の資料として『赤い星』をとらえ、スノーの取材と『赤い星』の執筆、出版を現場に置き直してみる価値は——それ自体が中国現代史上の一大事件であるがゆえに——なおあると考えられるのである。

謎に包まれていた陝西省北部（陝北）の共産党の根拠地をスノーが1936年夏に初めて訪れた時、共産党やその首領・毛沢東がその後になくなっていくのかを予想し得た人はいなかった。また、スノーが盧溝橋事件の直後に『赤い星』を北平（北京）で脱稿した時、日本と中国との戦争がその後8年も続き、さらには中国がその戦争に勝利するなど、かれ自身も見通せてはいなかったろう。同時代人の書いたルポの面白さは、結末を知らない人間が書いているという点にこそある。中国共産党や毛沢東の「試合結果」は知っているからという理由で敬遠されるには、あまりにも惜しいではないか。

本稿においては、まずかなりの紙幅を割いて『赤い星』の各種版本（英語に加えて中国語版、日本語版、ロシア語版）を検討する。英文原書の版本を比較検討することによって、同書の成書過程やスノーのそれぞれの時期の立場や考えの変遷をあと追うことができるだろう。また、『赤い星』の内容に最も深い関わりを有する中国、日本、ソ連で、この名著がどのように扱われ、紹介されたのかを掘り下げることによって、同書の翻訳や出版がそれらの国や体制の変遷を如実に示すバロメーターとなり得ることを示すつもりである。

原書各版の出版経緯や各国語版の状況をあきらかにすることは、そのままスノーの取材・執筆の過程をあと追うことにつながるはずである。そのさい、取材については、どのような準備を経て、如何なる者の協力を得て行われたのかを明らかにする必要がある。他方、執筆過程について言えば、その過程で西安事変、盧溝橋事件、第二次国共合作の成立といった現代史上の大事件が立て続けに起こっていることが重要である。そうした事件の発生や事態の変化に伴って、中国共産党の政策は統一戦線（簡単に言えば対国民党協力）に大きく傾いていくことになり、その結果、スノーは執筆・編集段階で修正・加筆・削除を余儀なくされたからである。本書を現代史資料と見なすとき、こうした資料生成の過程についての検討が重要であることは、言を俟つまい。

なお、『赤い星』の内容（構成）やスノーの経歴については、多くの若者がこの書を手にとったことがない、スノーの名も知らぬという近年の状況に鑑みれば、一応の説明をしなければならないのかも知れないが、この古典に敬意を払うという観点から、行論の必要に応じて最小限の記述をするにとどめることにする。本稿があえて「再読」と題する所以である。

『中国の赤い星』の執筆をはじめとするエドガー・スノーについては、英語の数種の研究書型伝記が、また中国語としてはおびただしい種類の読み物、記念文集が刊行されている⁽³⁾。中でも群を抜く水準を持っているのが、アメリカ各地に残るスノー文書を渉猟し、関係者へのインタビューを重ねて書かれたハミルトンによる伝記『エドガー・スノー伝』とトーマスの著作『冒険の季節：中国のエドガー・スノー』である⁽⁴⁾。本稿はハミルトンとトーマスの著作に依拠する点も多いが、両書は『赤い星』の英語版以外の状況や、スノーの取材を受けた中国共産党側の事情について、かなり理解を欠いているので、その不備を補いながら論を進めることにする。

I 『中国の赤い星』 英語版 *Red Star over China*—————

エドガー・スノーは、1936年10月下旬に陝北の中共根拠地の取材を終えて北平に帰還してから、単行本『中国の赤い星』の初版を刊行するまでの間に、同書の章節に相当する原稿を、特約記者をつとめていたロンドンの *Daily Herald* などに部分的に発表していた。確認される限りでは、北平帰還直後のスノーに対するロイター通信のインタビュー記事⁽⁵⁾を除けば、上海の *China Weekly Review*（『密勒氏評論報』）が1936年11月14日（および21日）にスノーの毛沢東へのインタビュー記事（中共の政策について）を毛の写真入りで掲載したのが最初で、*Daily Herald* は西安事変解決後の同年12月30日から翌年3月まで、スノー

の取材記事（Truth about Red China）を写真付きで断続的に連載している。

また、スノーが陝北で撮影した多数の写真、および中共関係者から提供された写真は、当時あっては、まさにスクープ写真と呼ぶべきものだったが、それらを一挙掲載したのが、創刊されて間もないアメリカのグラフ誌『ライフ（Life）』で、1937年1月25日号と2月1日号に分けて、40枚以上が説明を付けて掲載されている。そのさい、『ライフ』側は掲載に至らなかった分を含め、73枚を購入し、1枚につき50ドルを支払ったという⁽⁶⁾。

一方、『赤い星』のハイライトともなる毛沢東の語る自らの半生（The Autobiography of Mao Tse-tung）は、1937年7月からアメリカの雑誌*Asia*に連載された（11月まで）。つまりは、これら取材記事の雑誌・新聞への先行掲載によって、『赤い星』刊行までに、スノーの名はジャーナリズム界ですでに相当知れ渡っていたのである。1937年末までに発表されたスノーの取材記事（中共地区取材の記事に限定）を掲げると、次ページの表1のようになる（網掛けは中国国内の英語刊行物であることを示す）。

1 ビクター・ゴランツ版（1937年）

スノーの取材記録は、雑誌への発表と並行しながら集約・加筆され、盧溝橋事件勃発直後の1937年7月下旬ごろに脱稿⁽⁷⁾、以前よりスノーとの関係が強かったロンドンの左派系出版社ビクター・ゴランツ（Victor Gollancz）から同年10月に刊行された。すなわちゴランツ版、あるいはイギリス版の『中国の赤い星』である。ゴランツ版には、ハードカバー版とソフトカバー版があり、同内容だが、写真の配置にのみ異同がある（写真16点はソフトカバーでは本の中ほどに連続してまとめられているが、ハードカバーではバラバラに配置）。

このゴランツ版は、後述するアメリカ版（ランダム・ハウス版）とともに、たちまち版を重ね、出版界にセンセーションをまきおこした。英語圏での『赤い星』の売り上げや反響、書評については、トーマスの前掲『冒険の季節：中国のエドガー・スノー』に詳しいので、ここでは触れない。

2 ランダム・ハウス版（1938年）初版

ゴランツ版から3カ月遅れて、1938年1月にアメリカ版の『中国の赤い星』が、ニューヨークの大手出版社ランダム・ハウス（Random House）から出版された。実は、スノーは1934年3月の時点で、ランダム・ハウスと中国の共産主義運動にかんする本を出版する契約を結び（予定では同年末までに刊行）、750ドルの支払いを受けていた⁽⁸⁾。してみれば、ランダム・ハウス版こそが、出版さるべき本来の英語版であって、ゴランツ版は同社とス

表1 先行掲載されたスノーの記事・論説一覧

発行年月	タイトル	誌紙名、巻号	備考
1936年10月30日	Four Months with China's Red Army / American Journalist's Unusual Experience	<i>Peking and Tientsin Times</i>	ロイター記者による北平帰還直後のスノーへのインタビュー記事
1936年11月14, 21日	Interviews with Mao Tse-tung, Communist Leader	<i>China Weekly Review</i> , Vol. 78, No. 11-12	
1936年11月21日	Edgar Snow Says Original Report of His "Red" Interview Contained Misstatements	<i>China Weekly Review</i> , Vol. 78, No. 12	<i>China Weekly Review</i> が11月7日号でスノーの談話として発表した記事への抗議、訂正の書簡
1936年12月30-31日, 1937年1月4, 7日, 3月9-11, 17-18日	Truth about Red China	<i>Daily Herald</i> (London)	9回連載。3月18日には next: Long March と予告があるも連載なし
1937年1月20日	Red Army Leader Directs Big Campaign—With China's Red Army	<i>Shanghai Evening Post & Mercury</i>	主に周恩来へのインタビュー記事で、上記 <i>Daily Herald</i> (London) の1937年3月9日の記事と同内容
1937年1月25日, 2月1日	First Pictures of China's Roving Communists / An Army of Fighting Chinese Communists Takes Possession of China's Northwest	<i>Life</i> , Vol. 2, No. 4-5	
1937年2月	Direct from the Chinese Red Area	<i>Asia</i>	上記 <i>Peking and Tientsin Times</i> , 10月30日の記事の一部を転載したもの
1937年2月3-5日	The Reds and the Northwest	<i>Shanghai Evening Post & Mercury</i>	
1937年4月15日	Soviet Strong Man: Mao Tse-tung	<i>Democracy</i> , No. 1	
1937年7月8日	Life Begins at Fifty	<i>Democracy</i> , No. 5	徐特立の伝記
1937年7-10月	The Autobiography of Mao Tse-tung	<i>Asia</i>	4回連載
1937年8月	Chinese Communists and World Affairs: An Interview with Mao Tse-tung	<i>Amerasia</i>	
1937年8-9月	Soviet China	<i>New Republic</i>	4回連載
1937年9月	Soviet Society in Northwest China	<i>Pacific Affairs</i>	
1937年11月	The Long March	<i>Asia</i>	
1937年11月6日	I Went to Red China	<i>Saturday Evening Post</i>	

ノーとのある種の同志的關係を背景に、便宜的にイギリス版をアメリカ版と区別して先行出版したとも考えられる。ゴランツ版との違いは、写真が大幅に入替・追加されて61点になったことぐらいで、構成や内容はゴランツ版と変わらない。

写真の充実はランダム・ハウス版の大きな特徴だが、前述したように、スノーが撮った、あるいはかれが中共関係者から入手した写真は、ゴランツ版刊行よりも早くに、『ライフ』に40枚以上掲載（譲渡）されていた。『ライフ』に掲載された写真のうち、ランダム・ハウス版にも使われた写真は20点ほどあるが、奇妙なことに、ゴランツ版には1枚も使用されていない。ということは、ランダム・ハウス版における写真の充実は、写真のそれら雑誌への先行掲載（譲渡）によって、ゴランツ版と本来の契約相手であるランダム・ハウス版との間で、写真使用の権利において異なった制約があったせいなのかも知れない。

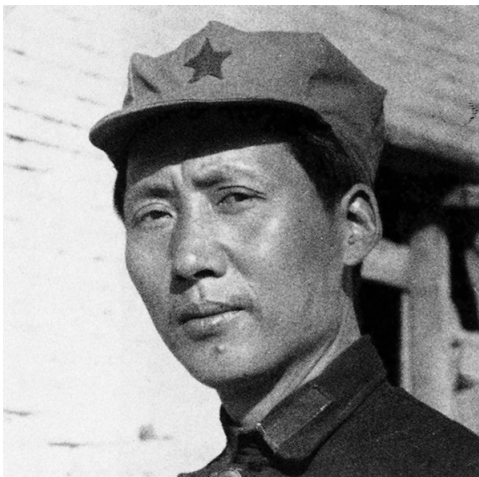


図 スノーの撮影になる毛沢東の写真（共に1936年）

いったいに、英語圏のジャーナリズムの世界では、この種の画像使用（所有）に関する権利意識が強く⁽⁹⁾、スノーが撮った毛沢東の写真といえば最も有名な写真【図左】も、『ライフ』がそれを買取ったせいか、ゴランツ版もランダム・ハウス版もそれ以降も、英語版では、一貫して別の写真（スノー撮影【図右】）が使用されている。もっとも、端正ないでたちのものではなく、やや野暮ったい風体のものを使ったという写真の選択は、著作権云々ではなく、スノーの毛沢東観を表しているという解釈も可能であろう。すなわち、スノーは『赤い星』の随所で、毛の飾らない人柄や振る舞いを好ましいものとして描いているわけだから、かれのそうした毛沢東観が写真の選択にも反映されているのだとも言えるのである。

いずれにせよ、『赤い星』に収録されたものを筆頭として、スノーの持ち帰った多数の

取材写真が、今日なお中国現代史、共産党史の第一級の資料であり、その後の中国共産党や毛沢東のイメージ生成に、非常に大きな役割を果たしたということに、疑問の余地はない。しかしながら、それら写真は、その後、様々に複製、加工、再利用されて拡散した結果、一部については、撮影者や場所、時期の誤った情報と共に流布してしまっているのが現状である。スノーの写真については、撮影や初出にかんする情報を集成したデータベースの構築がまたれる⁽¹⁰⁾。

3 ランダム・ハウス版（1938年）改訂版

ランダム・ハウス版は1938年初めに初版が出たあと、その年のうちに（秋ごろ）改訂版が出た。この改訂は、構成・内容・字句の変更を伴うものであった。構成上の変更点は、最後に第13部として“Shadows on the Rising Sun”（旭日の影）の章が追加されたことである。章の追加はその題が示すように、日中戦争の勃発に伴い、戦争に関する論評と見通しを述べたもので、1938年7月時点の状況にまで記述が及んでいる⁽¹¹⁾。

1938年改訂版の内容に関わる変更は、分量的には多くはないが、そのほとんどがソ連・コミンテルン・スターリンへの顧慮に基づく修正・削除である点が特徴的である。スノーは左翼系のものを含む中国の学生たちの抗日愛国運動に共感し、社会主義にも理解のあるジャーナリストではあったが、いわゆる左翼的党派人（共産黨員）ではなかった。『赤い星』にあっては、それがかれの著述を信頼性と魅力に富むものにしていただが、ソ連の国益を代弁する傾向のあったコミンテルン・各国共産党に、そしてスターリンの独裁傾向に強い反発を覚えていたスノーは、英語版初版の中で、微妙なニュアンスながら、そうした不満を表出させていた。それがアメリカ共産党をはじめとする左翼党派からの批判を招いたのである。すなわち、中国の革命運動と共産党にたいして、ある種の新鮮な驚きとナイーブな称賛をちりばめた『赤い星』は、意外にも右ではなく、左からの批判にさらされたのであった⁽¹²⁾。とりわけ、当時の共産党系党派の文脈では、スターリン支配下のコミンテルン路線への疑念を表明することは、かりにそれがほのめかしであっても、往々にして「トロツキスト」的見解だと見なされたのである。

今でこそ、『赤い星』をトロツキズムと関連づけながら読む者はいないだろうが、当時は、共産主義運動や左翼運動にかかわる者にとって、いわゆる「トロツキズム」との間合いは、極めて重大な問題であった。ごくおおざっぱに言えば、当時のトロツキストたちは、反ファシズム統一戦線路線に舵を切ったコミンテルン・ソ連の方針を、プロレタリアートの主体性を喪失し、ブルジョアジーに投降するものだと批判し、これに対して、コミンテルンや各国共産党は、そうした極左的言辞を振りかざす「トロツキスト」を、統一戦線を破壊し

てファシストに奉仕する革命の裏切り者、さらには売国奴だと指弾していた。指弾したばかりではない。各国共産党内においては、少しでも党の統一戦線方針に異を唱えようものなら、ややもすれば「トロツキスト」のレッテルを貼られ、弾圧・粛清の対象とされることすらあったのである⁽¹³⁾。

中共における反トロツキスト運動は、1937年11月にモスクワから王明、康生らが帰国してから本格化し、粛清を伴う苛烈なものになったと言われることが多いが、中共黨員馮雪峰が代筆して魯迅名義で発表した「トロツキー派に答える書簡」⁽¹⁴⁾が1936年6月に発表されているように、スノーの陝北潜入の時点で、すでに左翼党派人の間においては顕在化していた問題だった。スノー自身も、陝北に潜入して間もなく、中共の理論家・張聞天からトロツキズムの誤りについて、レクチャーを受けており⁽¹⁵⁾、当時すでに反トロツキズムが中共の活動にも影を落としていたことが知れる。

ただし、西安事変後に中共がコミンテルン・ソ連の方針に従い、国民党にさらに接近・妥協していくことに危惧を感じたスノーは、北平で『赤い星』の執筆を続けながら、折りにふれ、そうした危惧を延安にいる妻のヘレン・フォスター・スノー（Helen Foster Snow すなわちニム・ウェールズ Nym Wales）に書き送っていたようである。それに対して、ウェールズは延安の空気を紹介しつつ、もしスノーがその考えを『赤い星』で表明するなら、「左よりの考えが軒並みトロツキストと呼ばれる」ような状況下では、「多くの敵を作ってしまう」と忠告していた⁽¹⁶⁾。果たして、『赤い星』の刊行後、ウェールズの懸念は現実のものとなり、統一戦線へ突き進むコミンテルン路線に対するスノーの懐疑的筆致は、左翼的党派人から「トロツキスト」的見解の表明と目されたのである。「トロツキズム」との距離、これこそが当時の左翼文化界における『赤い星』の第一の評価軸だった。

そうした文脈を背景に、辛辣な『赤い星』批判をした左翼系文化人の一人が、当時中国に滞在していたハンス・シッペ（Hans Shippe, 1897–1941 筆名：Asiaticus）なる元ドイツ共産黨員で、1938年6月の『パシフィック・アフェアズ』（*Pacific Affairs*）でスノーと誌上論争をしている⁽¹⁷⁾。シッペはさらに自ら延安に出向き、『赤い星』の評価を直接に毛沢東にただしたが、毛は逆にスノーを擁護したと言われる⁽¹⁸⁾。もっとも、スノーがそれを知ったのは、かなり後になってからで、1938年7月に抗戦下の武漢を訪れたさいには、同地にいた中共幹部の秦邦憲（博古）から、『赤い星』のコミンテルンと中共の関係を論じた部分について、「あなたの批評は少しきつすぎた。おっしゃったことはすべて真実ですが、ただ問題は、今はこうした事柄に触れてほしくない、ということです」と告げられていた⁽¹⁹⁾。

同様の声は、当初『赤い星』を系列の書店に並べなかったアメリカ共産党からも寄せら

れ、これがスノーにはもっともこたえたようである。ミズーリ大学（カンザスシティ校）文書館のスノー文書には、1938年3月にアメリカ共産党の指導者ブラウダー（Earl Browder）に宛てて、以後の改訂版においては、共産党への誹謗にとられかねない部分を自主的に削除するむね通告したスノーの書簡が残されている⁽²⁰⁾。つまりは、ソ連やコミンテルンやスターリンへの不満の言辭は、一言半句も許さないという当時の米左翼界の隠然たる圧力と空気を前に、スノーも妥協の姿勢を見せざるを得なかったのだろう。

スノーが1938年版の改訂を行った時期は、1938年1月の初版に対して上述のような批評や意見が出始めたあとの春から夏にかけて、場所は北平を脱出したのちにしばらく身を置いた上海と考えられる。修正は、例えば次のように行われた（下線部が改訂版で削除された部分）。

And finally, of course, the political ideology, tactical line, and theoretical leadership of the Chinese Communists have been under the close guidance, if not positive detailed direction, of the Communist International, which during the past decade has become virtually a bureau of the Russian Communist Party. In final analysis this means that for better or worse, the policies of the Chinese Communists, like Communists in every other country, have had to fall in line with, and usually subordinate themselves to, the broad strategic requirements of Soviet Russia, under the dictatorship of Stalin.（初版、改訂版ともに374頁）⁽²¹⁾

（そして最後に、中国共産党の政治思想、戦術路線、指導理論は、明らかな指令とは言えないにしても、この十年ほど実質的にはロシア共産党の一部局と化したコミンテルンの緊密な指導下にあったことは言うまでもない。突き詰めて分析すれば、これは良い意味でも悪い意味でも、中国共産党の政策が、他のあらゆる国の共産党と同様に、スターリン独裁下のソ連の広範囲におよぶ戦略的要請に同調・従属せざるを得ないことを意味している。）

このほかにも、同様の傾向・理由による修正は、何カ所か確認できる⁽²²⁾。ただし、そうした箇所が、ブラウダーに約したように、すべて削除されているわけではなく、スターリンへの棘のある言い回しが残っている場合も少なくない⁽²³⁾。スノーとて、すべてアメリカ共産党の言いなりになることは、かれのジャーナリスト精神が許さなかったのだろう。

では、当のトロツキストたちは『赤い星』をどう見ていたのか。レッテルとしての「トロツキスト」が横行し始めていた当時の状況の中、真の「トロツキスト」と呼んで良いハ

ロルド・アイザックス (H. Isaacs) は、『赤い星』の直後に刊行した自著『中国革命の悲劇』で『赤い星』について、次のように論評していた。

スノーは、「トロツキストたちは、その“立場の論理”ゆえに、蒋介石になびき、同志を警察へ売り渡している」というような中傷を——トロツキストの“立場の論理”など全く理解していないくせに——安易にオウム返ししている。その一方でかれは、己が立場の奇妙な「論理」によって、その蒋介石になびき、労働者や農民をブルジョアジーに売り渡している共産党を熱烈に賛美しているのである。⁽²⁴⁾

つまりは、コミンテルンの統一戦線路線を奉じる中国共産党を好意的に描く限り、アイザックスらトロツキストの側から見れば、それへの疑念をほのめかす程度の筆致では、コミンテルン・スターリン路線のしもべと大差ないのである。中国の共産主義運動について、それを国際共産主義運動との関連で論評すれば、それらにどう配慮したところで、イデオロギー対立の深刻な左翼諸派全般から称賛されることはあり得なかった。

4 ランダム・ハウス版 (1944 年)

『赤い星』の次の改訂は、1944年に行われた。当時スノーはすでに中国を離れ、アメリカに帰っている。1944年版 (ランダム・ハウス) では、1938年版に付けられた第13部 “Shadows on the Rising Sun” が削除され、代わって “Epilogue 1944” が追加された。スノーは、戦争の推移に伴い、日中戦争勃発直後に書いたものは1944年時点では意味を失ったと判断し、代わりに、自らが取材して世界に知らせた「赤い星」たちが長期にわたる抗戦を通じて成長し、期待に違わぬ活躍をする一大勢力となったことに、いささかの自負を表明する「エピローグ」を配したのである。これ以外に版面の変化で顕著なのは、1944年版が写真を一枚も掲載していないことだが、その理由は1944年版への序文にも書かれておらず、詳しいことはわからない。

5 グローヴ・プレス拡大改訂版 (1968 年)

『赤い星』が最後に大きく変貌するのは、1968年の拡大改訂版のさいである⁽²⁵⁾。1944年の改訂ののち、日本への戦勝、そして中華人民共和国の成立と、中国は大きく変わった。スノーが取材した陝北の中国共産党は、毛沢東を押し載いて、新中国の主となったのである。この間、かつての謎の集団やその首領たちについても、種々制限はありながら、より詳しい情報がもたらされるようになった。また、共産党そのものも大きく変貌し、『赤い星』

に登場した人物たちにも、30年余りの間に浮き沈みが見られるようになった。基本的に単独取材の成果である『赤い星』は、先駆的著作であるがゆえに、いきおい不備も目立ったわけで、何らかの大改訂は避けられなかったと言えよう。

この間、レッドパージのアメリカを離れたスノーは、1950年代後半に『赤い星』の関連書（一つは『赤い星』に収録できなかった資料などをまとめた『中共雑記』⁽²⁶⁾、もう一つは自伝的著作⁽²⁷⁾）を刊行していたが、そうした一種の下準備を経て出されたのが1968年版（New York: Grove Press）である。なお、スノーはこの版の出版後間もなく、最後の訪中をし、1972年にこの世を去ることになる。

当時、毛沢東の進める革命運動（文化大革命）がなお進行中であったため、『赤い星』は、古典でありながら、情報のアップトゥデート化を求められるというジレンマを抱えることになった。実は、スノーは1944年の改訂の際に、一度全面的な書き直しを試みて挫折していた⁽²⁸⁾。ルポルタージュの書き直しは、かりに情報を最新のものに更新することに重きを置くとしても、どうしても、のちに到達した認識に基づいて、ルポ当時の（無知ゆえの）認識を書き換えるという作業を伴う。それは、読者に正しい情報を提供するように見えて、実はルポルタージュ当時の認識や臨場感を覆い隠すことに他ならないのである。

1968年版の改訂で、スノーは明らかな誤記などは、関連情報を補記する（本文部分への関連記述の追加や補注の作成）などして訂正したが、章立ては1944年版を踏襲し、基本的に本文には大きく手を加えなかった⁽²⁹⁾。それが顕著に表れているのは、朱徳の生涯をつづった第10部第4章の「朱徳について」である。実は、スノーが1936年に陝北を訪れた時、朱徳はなお長征の途上にあつて、陝北にはいなかった。そこでスノーは、やむなく朱徳の部下だったことのある人物などからの聞き取りに基づいて、朱徳の半生を紹介していた。ただし、アヘンは吸う、妾は何人も囲うなど、放蕩三昧の若き日を送ったことになっている『赤い星』の「朱徳について」は、1937年の初版時点ならいざ知らず、1960年代ともなれば、明らかに誤りだらけだった。スノーは1968年の時点で、この章の全面書き換えもできたはずだが、「原典の形式と精神をそこなわないために」、「記録が残されていない時代の紅軍物語の一部」⁽³⁰⁾として、若干の手直しを加えただけで、あえて元の文章を残している。他方、その時点までに明らかになった中共・紅軍関係者の経歴や、旧版では紙幅の関係で盛り込めなかった取材記録の一部などは、本編とは別に巻末付録として収録された。それら付録は、分量にして80頁ほどに及んでいる。

写真（55点）について言えば、1968年版ではかなりが入れ替えられた。1938年版に掲載された61点のうち、そのまま使われたのは16点で、それまで雑誌や中国語版でも公開されたことのないものが21点を数える。スノーにとって、1968年版はおのれのジャーナ

リスト生涯の集大成だったことがうかがえよう。『赤い星』所収の写真について附言すれば、1937年版、1938年版、1968年版のいずれにおいても、スノー（およびかれに遅れて陝北の取材をしたニム・ウェールズ）が撮影した、もしくは当時陝北で中共から提供されたもの以外の写真、すなわち別人がとった写真や後世に撮られた写真は、一枚たりとも使われていないことを見落とすべきではなかろう。スノーは（ニム・ウェールズも）、決して写真撮影の専門家ではなく、それゆえに今日で見ると、必ずしも上出来とは言えない写真も混じっている。また、1968年ともなれば、毛沢東にせよ、中国革命にせよ、写りの良い写真はいくらか出回っていた。それにもかかわらず、スノーが最後の版に到るまで、自らが撮った古い写真にこだわり続けたことは、自分こそが1936年の中国共産党と毛沢東の真の目撃者・証人なのだという、『赤い星』の著者としての揺るがぬ自負（「原典の精神をそこなわない」）を物語っているだろう。

II 中国語版『西行漫記』およびその他の節略版

スノーの中共根拠地取材記は、英語で発表されると間もなく、中国語に翻訳され、様々な形態で江湖に流布した。その代表的なものが1938年に上海の復社より刊行された『西行漫記』であり、この本を読んで感激し、その後の人生が変わった中国青年は数知れない。人民共和国では、そうした人々の声を集めた『《西行漫記》とわたし』という文集すら刊行されているほどである⁽³¹⁾。

だが、時期から言えば、スノーの記事が『西行漫記』よりも早くに中国語ジャーナリズムの世界に大きな影響をあたえていたことを見逃してはならない。英語版について先にも触れたように、単行本『中国の赤い星』が刊行される以前に、スノーは1936年11月ごろから中国内外の英文期刊に同書の章節に相当する原稿を部分的に発表していた。ただし、当時の言論統制の状況下では、中共の政策についての毛沢東の談話や中共統治下の民衆生活の様子などを、公開の中国語メディアは到底掲載できなかった⁽³²⁾。

それゆえ、中国語期刊で、最初にスノーの取材をある程度の分量で翻訳紹介できたのは、パリで発行されていた中共系雑誌の『救国時報』であった。同誌はモスクワで編集され、パリで印刷・発行されていたため、中国国内の言論封鎖の外にあったというわけである。同誌は、1936年12月（73期）に「毛沢東先生論抗日救国聯合戦線」を掲載⁽³³⁾したのを皮切りに、翌年にかけて *Daily Herald* (London) などからスノーの記事を翻訳している⁽³⁴⁾。だが、何と言っても、『救国時報』は遠く離れたパリで刊行された雑誌であり、中国国内への影響は極めて限定的だった。

1 『外国記者西北印象記』（1937年）

こうした中、スノーの記事をある程度まとめて翻訳・紹介したのが、1937年4月ごろに北平で秘密出版された中共根拠地についての評論集『外国記者西北印象記』である。全300頁ほどのこの本（奥付の記載では、上海丁丑編訳社刊、1937年。「訳者序」〔訳者名は挙がっていない〕の日付は1937年4月1日）は、スノーの取材記事（施楽「毛施会見記」、施楽「紅党與西北」、施楽「紅旗下の中国」⁽³⁵⁾）だけでなく、かれに先だって中共根拠地について発表されたノーマン・ハンウェル（Norman Hanwell）のレポート（韓蔚爾「中国紅軍」、韓蔚爾「中国紅軍怎樣建立蘇区」、韓蔚爾「在中国紅区裏」⁽³⁶⁾）と「中日問題與“西安事變”（毛沢東與某外国記者談話）」⁽³⁷⁾、および付録として廉臣「隨軍西行見聞録」⁽³⁸⁾を収めたものであった。この本は1970年代に中国で発見され、その後『西行漫記』の雛形という評価を受け、2006年に『前西行漫記 原名《外国記者西北印象記》』と題して版を組み直した上で復刻された⁽³⁹⁾。ただし、復刻にさいしては、スノーやハンウェルのそれら文章の原載が何であるかについては、ほとんど関心が払われていない⁽⁴⁰⁾。本稿がそれらにあえて注記した所以である。

原載を精査して判明するのは、この本に収録されたスノーの文章や写真には、それまで雑誌などに発表されていないもののがかなり含まれていることである。例えば、「毛施会見記」の一節「外交」の原文は、『印象記』出版ののちに *Amerasia* の1937年8月号に発表されている⁽⁴¹⁾。また、『印象記』には、表紙を含めて34枚の写真が掲載されているが、その中には、それまで雑誌などに発表されたことのないもの、あるいは『赤い星』1968年版にのみ掲載されているものも含まれている。これは何を物語るか。考えられる可能性はただ一つ、『印象記』はスノーの積極的関与のもとで刊行されたものだということである。

スノーは後年、「西北への旅について、わたしは1936年の末から翌年初頭にかけて、一部を書きあげ、新聞に連載されたその原稿の写しを北京の中国人教授連中に手渡した。かれらはこれを中国語に訳し『中国西北印象記』と題して出版した」⁽⁴²⁾と述べているが、ここで言及されている『中国西北印象記』とは、『外国記者西北印象記』のことにほかならない。スノーはその一文に引き続いて『西行漫記』について言及し、「これのみが『中国の赤い星』の正訳である」とも述べているのだが、『外国記者西北印象記』が自身の許諾を得て出されたのかについては、あまりハッキリした説明をしていない。一方、その翻訳を担った中国人（当時、スノーの取材・執筆・原稿整理などの手伝いをしていた王福時、郭達、李放ら）は後年の回想⁽⁴³⁾で、スノーの許諾・支援を示唆しているが、『印象記』所収の文章・写真の出所を洗い出すことにより、かれの積極的関与、すなわちかれが未刊原稿や写真を積極的に提供して翻訳させていたことが、あらためて明確になるのである。

前述のように、スノーの取材記は、英語メディアであれば、国民政府統治下の当時の中国でも発表できた⁽⁴⁴⁾が、中国語メディアでは掲載は難しかった。中国語の公刊雑誌にスノーの取材記が翻訳されるのは、抗日戦争勃発後の1937年8月に上海の雑誌『文摘』に登場した「毛沢東自伝」(Asiaからの翻訳)⁽⁴⁵⁾の連載、および同誌9月号の「毛沢東論中日戦争」⁽⁴⁶⁾を待たなければならない。こうした中、スノーは中国国内にあっては、国外向けのジャーナリストとは別の顔、すなわち政治や運動への参与者として振る舞うことを厭わなかったふしがある。そもそも、かれは陝北に潜入する以前にあっては、妻のニム・ウェールズとともに、北平の学生たちの抗日愛国運動を積極的に支持し、1935年の一二・九運動発生にコミットしていた⁽⁴⁷⁾。非公式の翻訳物である『外国記者西北印象記』への原稿・写真の提供も、西洋流の著作権規範からは外れるもののはずだが、スノーはそれよりも、自らの著作が現実に関与する方を優先したのである。こうしたスノーの姿勢は、『赤い星』の真の中国語訳たる『西行漫記』においても、同様にうかがうことができる。

2 『西行漫記』(1938年)

『赤い星』の中国語版として、よく知られているのが、王厂青等訳『西行漫記』(上海:復社、1938年)である。Red Star over Chinaをそのまま訳して書名にしたのでは、検閲・発禁を免れがたいため、『西行漫記』なる書名にしたこと等々、同書の翻訳と発行のいきさつについては、そのコーディネーターをつとめた胡愈之の回想録⁽⁴⁸⁾をはじめとする資料が出されており、すでに謎は多くない。胡の回想によれば、上海での抗日戦争勃発後も救亡協会のジャーナリストメンバー⁽⁴⁹⁾として同地に残ったかれは、おりから上海へやって来たスノーの知遇を得て、ロンドンから送られてきたばかりの『赤い星』を入手、中共黨員劉少文を通じてスノーと同書が共に信頼のおけるものであることを確認したのち、知り合いの若者数名による分担翻訳を差配したのだった。翻訳に着手したのは1937年12月で、翌年1月末には出版にこぎ着けることができたという。こうした異例とも言える速さで中国語版が出版できた理由として、胡はかれら翻訳グループの熱意のほかに、スノーの協力を挙げている。すなわち、スノーは手元にたった1冊しかなかった原書を提供するだけでなく、記述の不備を改訂し、さらには原書には収録されていない写真を新たに提供しさえしたというのである⁽⁵⁰⁾。具体的に見てみると、『西行漫記』に収録された51枚の写真のうち約20枚は、1937年版の原書や前記の『外国記者西北印象記』を含め、それまで一度も発表されたことのないものであった⁽⁵¹⁾。

一方、『西行漫記』の中身に目を転じると、内容の変更に關わる修正がいくつか施されている。まずは、同書が国共合作成立後の中国で刊行されたことに伴う変更で、国民党へ

の批判的言辞が削除されている点である。例えば、革命根拠地の住民への国民党軍の残虐行為について述べた徐海東に、スノーが「それは国民政府の軍隊について言っているのですね」と念を押したのに対し、徐が「そうです。湯恩伯將軍の第13軍と王均將軍の第3軍でした」と答える部分（原書1937年版316頁）が、『西行漫記』では削除されている。言うまでもなく、国民党が共産党の敵であった1936年に語られたこの内容は、国共合作体制で抗日戦争に臨んでいた1938年初頭の中国では、不適当なものになっていたのである。

このほか、第11部第5章の“*That Foreign Brain-Trust*（外国人顧問）”がまるごと削除されている。この章は、当時コミンテルンから中共に派遣されていたドイツ人軍事顧問（中国名：李徳、原書では *Li Teh* と表記され、本名〔オットー・ブラウン *Otto Braun*〕は明かされていない）の存在とその役割について述べた章である。コミンテルン・ソ連の紅軍への援助は、物量的には極めて限定的なものだったものの、ブラウンらを通じてもたらされたその影響力は、時としてマイナスに作用したことが、中共の福建事変（十九路軍）への対応を例にして説明されているが、この章が全く訳出されなかったわけである。この処置も、恐らくは中共（あるいは、コミンテルン・ソ連）のイメージを損なわぬよう、特に間接的なコミンテルン批判として読まれかねないという政治判断からなされたものだと推測できる。

問題は、こうした修正はスノーが訳者に原稿を渡す以前に行っていたものか、それとも訳者（あるいは胡愈之）が行ったものか、である。これに関して、『西行漫記』の「訳者附記」は、それら英語版初版と異なる部分、つまり修正は、第11部第5章の全文削除を含めて、すべてスノーによるものだと述べている⁽⁵²⁾。筆者はこの説明は基本的に正しいと考えるものである。以下、若干の関連事例を示し、それを明らかにしよう。

1938年秋に英語版原書の改訂版が出されたさい、スノーがソ連・コミンテルン・スターリンへの批判的、あるいは「不適切」な言辞を一部削除するような修正を行ったことは前述したが、こうした点は『西行漫記』ではどうなっているか。『西行漫記』の翻訳は、その改訂版が出る以前になされているわけだから、本来ならそれら「不適切」な箇所を含んでいるはずである。例えば、先に9頁で原文を対照紹介した箇所は、『西行漫記』では次のようになっている。

中国共産党的理論上の領導，戰略上的路線，以及政治意識的結局，不消說，是在共產國際的密切的指導之下的（雖然沒有明確詳細的命令）。這一共產國際，事實上在過去十年來，已成為蘇聯共産党的辦公機關。分析到最後，這好歹意味着：中国共産党的政策，正和每一其他國家的共産党一樣，是和蘇聯廣範的戰略上的要求相一致的。（459頁）

すなわち、原書初版にほぼ忠実な訳だが、「蘇聯」にかかるはずの *under the dictatorship of Stalin* の一句のみが訳出されていないのである。実はこのほかにも、1938年の英語改訂版で修正された箇所が多くが——全くその通りではないが——『西行漫記』で部分的にと修正（削除）されていることが確認できる⁽⁵³⁾。つまりは、こうした修正は訳者や胡愈之が行ったのではないこと、すなわちスノーがかれらに修正済みの英文原稿を渡し、それが翻訳されて『西行漫記』になったのだと言えるのである。同様に、朱徳の生涯をつづった第10部第4章の「朱徳について」が、英語原書では、初版以来一貫して不正確なものであったことは先に紹介したとおりだが、『西行漫記』の該当部分は、朱徳の自述スタイルのものに差し替えられている。そしてそこには、誤情報の多い英文版の朱徳伝は、ニム・ウェールズ提供の最新情報によって書き換えるというスノーの注記が見えるのである⁽⁵⁴⁾。

かく見れば、『西行漫記』とは、『赤い星』原書の翻訳というよりも、スノーが中国語版のために提供した改訂稿を翻訳したもの、すなわち『赤い星』の特別版とでもいうべきものだったと結論できよう。その特別版は、ソ連・コミンテルン・スターリンへの党派的配慮という点で言えば、1938年の英語版初版と改訂版の中間に位置するものであり、朱徳伝の全面差し替えや収録写真の構成という点から見れば、英語版『赤い星』では実現できなかった同書の完成形であったとすら言えるだろう。先にも述べたように、スノーは英語版『赤い星』の改訂の機会があるたびに、大幅な書き換えを考えてはいたが、同書の古典的ルポルタージュとしての性格に鑑みて、結局は大きく構成を変えたりすることはなかった。だが、中国語世界での初版であれば、完全な形（正しい情報）にして送り出すことができる。『西行漫記』にスノーが托したのは、そうした願いではなかったか。

ただし、『西行漫記』に訳者や胡愈之の意向がまったく入っていなかったとは言えまい。例えば、『西行漫記』に寄せたスノーの序に見える「在蔣介石委員長賢明領導之下」といった言葉遣いは、到底スノーのものとは思えず、胡愈之らが当時の政治情勢に鑑みて潤色したものであろうと推測される。同様に、先に挙げた国民党軍の残虐行為についての記述削除も、スノーの意向というよりも、発禁を免れるための便宜的措置として、翻訳する側が行ったのではないかと見られる。もっとも、こうした苦心にもかかわらず、『西行漫記』は国民党支配地域では、たちまち発禁図書に指定されてしまうのだが⁽⁵⁵⁾。

ただし、発行元の復社がすでに国民政府の支配の及ばなくなった上海にあったためか、『西行漫記』は国民政府の発禁処分にもかかわらず、版を重ね、さまざまに変形された翻案本、節略本とともに広く流布した。こうした経緯をへて出された『西行漫記』の影響については、すでに中国で多くの文章が書かれている⁽⁵⁶⁾ので、本稿では割愛する。ただし、1949年以降の中国における『西行漫記』については、言及されることがまれなので、それにのみ一言しておく。

3 人民共和国における『中国の赤い星』

1949年の人民共和国成立まで、スノーの取材記事に由来する『中国の赤い星』の各種中国語版——その代表格はもちろん『西行漫記』——は、おびただしい部数が発行され、中国共産党とその首領毛沢東の影響力の拡大において、絶大な役割を果たした。種々のスノー本の発行が中共の手によって行われたことも珍しくない。だが、奇妙なことに、『西行漫記』は1949年を境に、中国では十年ものあいだ再刊されることのない図書となってしまった。版を組み替えて『西行漫記』が三聯書店から復刻されるのは、スノーの新中国訪問がなかった1960年のことだが、そのさい同書は「内部読物」の指定を受け、普通の中国人読者が店頭で買えるような本ではなくなっていたのだ⁽⁵⁷⁾。1949年以前、党とその指導者を宣伝するため、スノー本を活用した中共が手のひらを返したように同書を無視するようになったのはなぜか。

原因は二つあるように思われる。一つは、スノーの人民共和国成立前後の言動が中共をいらだたせるようになっていたことである。スノーは中共の勝利と人民共和国建国を、スターリン流の社会主義とは一線を画す、ある種の民族主義型共産主義政党の勝利と捉えていた⁽⁵⁸⁾。すなわち、チトーとユーゴスラビアのありようを毛沢東と人民共和国にも重ね合わせて見ようとしていたのである⁽⁵⁹⁾。これは、ソ連との揺るぎなき同盟を基礎として国づくりを始めようとしていた中共の方針・イデオロギーと大きくずれるものであった。ソ連と中国とを一枚岩と見なさない見解は、中国問題のジャーナリストのそれとしては一家言たるものであったが、中共を含む社会主義陣営からは、中ソの不和をあげつらい喜ぶものだと見なされたのである。その言がほかでもない、スノーの口から発せられたのだから、中国の反発もそれだけ強かった。かくて、1952年には中国で活躍するジャーナリストのエプシュタイン（Israel Epstein）から公開発行の雑誌上で、スノーは米帝の手先、ソ連を誹謗する者として名指し批判されるに到ったのである⁽⁶⁰⁾。この時期の中共にとって、スノーは決して中国人民の友ではなかった⁽⁶¹⁾。

『西行漫記』が再刊されなかったいま一つの理由は、『赤い星』の語る革命史像や毛沢東像、あるいは書中の登場人物たちのエピソードや評価が、1949年をはさんで確立しつつあった中共の公式歴史叙述と一致しないものだったことであろう。中共は、毛沢東の旗振りのもとで行われた中共党史像再構築の結晶たる「若干の歴史問題にかんする決議」を1945年に承認・採択していた。『赤い星』の伝える毛沢東像は、十分に魅力的なものではあったが、1949年には毛は無謬なる指導者というさらなる高みへ押し上げられており、スノーにたいして毛が披瀝した「自由な語り」⁽⁶²⁾は、むしろ扱いに困るものになっていたのである。かくて、人民共和国初期の毛沢東伝は、『赤い星』の自述しか頼れる資料のない毛の

幼年期を描く際、曖昧な形で『赤い星』の引用書誌を出さざるを得なかった。例えば、李鋭「毛沢東同志の初期革命活動」（『中国青年』1953年第13期より連載）は、スノーの名を出さず、「一美国記者著『西行漫記』第〇章」として同書を引用していた⁽⁶³⁾。その結果、1960年代に訪中した日本の学生が『赤い星』を読んだ感激を語っても、中国の若者は誰もスノーの名前も本も知らなかったというような奇怪なことが起こったのだ⁽⁶⁴⁾。

『赤い星』をめぐるこうした情報統制のタガがはずれたのが文化大革命時期で、「毛主席に学ぶ」ことを名目に各種の毛沢東著作集が非公式に編纂・発行されると、毛沢東自述の部分だけが、『毛沢東自伝』『毛主席的回憶』などのタイトルで、非正規に大量に再刊・複製された。いわば、『西行漫記』は半ば禁書の扱いを受けながら、自述の部分だけが爆発的に流布したわけである⁽⁶⁵⁾。周知のように、スノーは毛沢東に招かれて1970年8月から翌年2月にかけて生涯最後の訪中をし、そのさい米中関係改善のシグナルとなるメッセージを毛沢東から託されることになる。この訪中の期間、天安門楼上で国慶節の行事に臨むかれと毛の写真が、『人民日報』の一面に置かれたことがあったが、スノーは紙面で単に「美国友好人士」と説明されるだけで、かれと毛沢東とがどんな関係にあるのかも、何らわからないようになっていた。当然に『西行漫記』の著者であることなど、全く説明されていない⁽⁶⁶⁾。それどころか、スノーの1970-71年の訪中期間の『人民日報』を探しても、かれが『赤い星』（『西行漫記』）の著者であることに触れる記事は皆無である。それが当時の中国での『赤い星』の境遇であり、多くの中国人にとって、『西行漫記』はほとんど未知の書物だったに違いないのである。

もっとも、スノーと中共との関係について言えば、当時の中ソの関係は一枚岩どころか、戦争もささやかれるほどの決定的対立状況であったから、中ソの違いを予見したスノーの1949年時点の見解を蒸し返す必要は、中共の側には全くなかったであろう。ジュネーブに帰還後、ガンの床についたスノーに対し、中共は1972年初めに医師団を派遣してかれの最期を看取らせ、2月15日にスノーが死去すると、毛沢東、周恩来、宋慶齡らの名義でこの「中国人民の友」に哀悼を捧げた。だが、かれらの弔電は、毛沢東や共産党の革命運動を初めて世界へ報道したスノーの偉業を称えながらも、どれも『西行漫記』という書名を挙げることをしなかった⁽⁶⁷⁾。ほかでもない、同書は半ば禁書だったからである。当然に、スノーを記念して『西行漫記』が再刊されたり、『赤い星』の新訳が出たりすることはなかった。

4 文化大革命終結後の『中国の赤い星』

文化大革命の終結後、『赤い星』は正式に翻訳しなおされ、1979年12月に二種の翻訳が公刊された。全訳としての ①『西行漫記（原名：紅星照耀中国）』（董乐山訳、三聯書店——以下、董訳本と略称）と部分訳としての ②『毛沢東1936年同斯諾の談話』（呉黎平整理、人民出版社——以下、呉訳本と略称）の二種である。1979年は米中国交正常化実現の年だから、中国で『赤い星』が復刊されるのに不思議はないが、全く同じ時期に出された二種の訳本が、互いに関係しあっていたのかどうかはよくわからない。ただし、同書の持つ特別な価値や当時の中国の出版体制に鑑みれば、二つの本がそれぞれ無関係に企画、発行されたとは、常識的に言って考えにくい。

まずは、現在最も通行している中国語版たる①董訳本から説明しよう⁽⁶⁸⁾。『赤い星』を翻訳し直して再刊するという計画は、1975年（フォード米大統領訪中の年）冬に三聯書店から董乐山（1924-1999）に持ちかけられたものだった⁽⁶⁹⁾。董は新華社の外文翻訳部で働いたこともある翻訳のスペシャリスト（にして「摘帽右派」）で、当時五七幹部学校からもどったばかりだった。当初は、旧訳の『西行漫記』をもとに、その後出版された英語新版などに照らして修正と補記を施すということが考えられたが、結局は全面的に翻訳しなおす方が良いということになったのだという⁽⁷⁰⁾。この名著の再翻訳にあたり、董は当時の中国の歴史叙述の定法に照らしてスノーの原文に「適宜修正を加える」翻訳ではなく、原文通りに翻訳し、必要な箇所には訳注を附すやり方をとるよう主張して、出版社にそれを認めさせた。原文通りに翻訳する、訳者の判断で修正しない、そんな当たり前のことがなかなか通用しない時代のことであった⁽⁷¹⁾。

董訳本は、1937年のゴランツ版初版を底本として翻訳されたものである。前章で説明したように、『赤い星』の英語版は、スノー自身の手で何度か改訂されており、どの版を底本とするかは難しい。1970年代後半であれば、1968年拡大改訂版が英語の最新版のはずだが、董は最初の版本をこの古典の本来の姿と見なしたのであろう。董訳本が「西行漫記」というなじみのある旧訳書名に加えて、「紅星照耀中国」という訳書名を併記したゆえんである。

しかしながら、先にも指摘したように、ゴランツ版をはじめとする英語版には、どれにも決定的な不備があった。朱徳の伝が誤った情報に基づいて書かれており、スノーはそれの不備を注記しながらも、以後の版でも基本的に書き換えをしなかったという点である。唯一、スノーがその不備を正して書き直したのが、1938年の中国語版『西行漫記』である。むろん、これが収録する朱徳伝は中国語があるだけで、その元になった英文原稿（スノー提供）は伝存しない⁽⁷²⁾。かくて、董訳本は朱徳伝の部分だけを、その旨を説明した上で、

『西行漫記』から再録している。

それゆえ、董訳本は厳密に言えば、英語版のどれとも対応しないのであるが、前述のように、『西行漫記』はスノーにとって、英語版『赤い星』では実現できなかった同書の完成形であったとも言えるだけに、これは不適切な処置とは言えまい。董訳本は改革・開放の時代思潮とも重なり、その後1982年までに165万冊を売り上げる大ベストセラーとなり、一部の誤訳、誤植を修正したものが『斯諾文集』（新華出版社、1984年）にも第2巻として収録されている。ただし、原文通りの翻訳を謳う董訳本も、党の現指導者がかつて口にした「下ネタのジョーク」（略帯“葷味”的笑話）の部分削除するなど、政治に配慮した改変がないわけではない⁽⁷³⁾。また、中国語版であるがゆえに期待される漢字人名の同定をはじめとして、訳注なども十分とは言えず、再改訂が待たれる⁽⁷⁴⁾。

一方、②呉訳本は、かつてスノーの毛沢東取材のさいに通訳をつとめた中共幹部・呉亮平（1908–1986、通常は呉亮平として知られる）が『赤い星』の毛沢東自述関連部分（第4部「ある共産主義者の来歴」、第5部「長征」）と、当時英語雑誌に掲載されたスノー取材の毛沢東インタビューを、改めて翻訳した上で、合わせて収録したものである。実は陝北取材当時、スノーは簡単な中国語会話ができる程度で、読み書きはあまりできなかった⁽⁷⁵⁾。それゆえ、取材には通訳が不可欠だったが、毛沢東ら党首脳への重要な取材のさいに通訳にあたったのが、当時党中央宣伝部副部長にして党内きっての語学通、理論家の呉亮平だった。また、紅軍兵士などへの日常的な取材のさいには、清華大学出の黄華（当時の名は王汝梅）が助手兼通訳をつとめた。自述をはじめとする毛の言葉は、呉が英語に通訳してスノーが筆記・整理し、それを呉や黄が中国語に翻訳して毛沢東に確認してもらう（必要に応じて毛が修正し、それを黄を通してスノーに返却）という手順を踏んで記録された⁽⁷⁶⁾。それがさらにもう一度中国語に翻訳され、『西行漫記』あるいは『毛沢東自述』として流布したわけだが、呉亮平はかつて通訳をつとめたそのインタビューが後年、かくも影響の大きな書物になったことにある種の責任を感じ、修正・整理の上で再翻訳をはかったようである。その場合の責任とは、次のようなものであつただろうと推測できる。

人民共和国成立後、毛沢東の著作や談話の主要なものは、偉大なる指導者の知的営為の結晶として『毛沢東選集』に収録され、金科玉条となったが、スノーによって記録された毛の談話（自述を含む）は、一篇も収録されていない。中共にとっては、自述はあくまでも非公式の談話記録だったわけである。にもかかわらず、文革時期に濫造された毛沢東自伝の影響力は、無視できないほど大きかった。となれば、インタビュー当時、毛沢東の口と耳の役目をつとめた呉亮平は、毛沢東とスノーになり代わって、その談話記録を公式記録に準ずるものにしていく責任、少なくとも誤解を招きかねない箇所を修正する責任を感じ

じたのである。これについては、呉本人が「前言」で次のように述べている。

〔毛沢東自述の部分については〕わたしの記憶で、毛沢東同志の談話の本来の意味と合っていないことが確実なものは、必要な訂正を加えざるを得なかった。当時のスノーは、わたしの口頭通訳がなければ、毛沢東同志の談話の内容を理解することができなかったわけで、もし当時の通訳者としてわたしがスノーの一部の記述に必要な修訂を加え、それによって毛沢東同志の原意をより正確に表現できるのなら、スノーが仮に今日なお存命だとしても、反対するまいと思うのである。⁽⁷⁷⁾

では、呉がいう毛の原意をより正確に表現するための修訂とは、どんなものだったか。毛沢東の出身階級についての呉の注釈などがそれに該当すると考えられる。『赤い星』で毛は自らの父親について、もと「貧農」(poor peasant)だったが、後に才覚をいかして蓄財し「中農」(middle peasant)に、そしてさらにその後「富農」(“rich” peasant)になったと述べていた。呉訳本ではこの部分に、自分(呉亮平)が“rich peasant”と訳してスノーに伝えたこと、その部分を中国語(富農)にして毛沢東に見せたが、毛はその箇所を修正しなかったこと、また解放後の毛家の階級区分は「中農」だが、それはこうしたスノーの記述と矛盾するものではないことなどを解説する詳細な注が付けられている。

いうまでもなく、人民共和国期の、とりわけ文革期の中国では、出身階級はその人の第一の属性であったから、文革期に氾濫した毛沢東自伝で、毛自らが出身階級を富農と述べたことは、少なからぬ混乱を引き起こしたのであろう。そうした「誤認」を解き、正しいテキストにすることが、文革終息後ほどなく出された呉訳本の使命だったわけである⁽⁷⁸⁾。また、呉亮平は訳本の公刊に先立って見本本を何百部か作成し、中共中央の指導者などに送って意見を求めてもいた⁽⁷⁹⁾。毛自述を公式記録にできるだけ近いものにしようとした呉の意図は、そうした点からも、また同書の出版元が人民共和国で最も権威ある人民出版社であることから、うかがえよう。

ちなみに生前、スノーは通訳をつとめた呉亮平について、「〔1936年当時〕党内ですでにマルクス主義理論家として通っていた。毛は明らかに呉に好意を寄せていたし、他の政治局員たちも同様だった。……現在〔1957年〕の地位はわからぬが、(表むき)最上位にいないことに、むしろ驚きを感じるのである」と論評している⁽⁸⁰⁾。スノーのこの言葉は、かつて中央宣伝部副部長という高位にあり、有能でもあった呉が、その後目立った活動の場を与えられなかったことを怪しむニュアンスである。実は、呉はスノーの通訳をつとめて間もなく、トロツキストの嫌疑をかけられて党内の要職から逐われ、その嫌疑が晴れた

後も、毛沢東の個人崇拜や強引な社会主義化路線に積極的に与しなかったため、党内政治ではまったく振るわなくなる人物である⁽⁸¹⁾。陝北を訪れたスノーやニム・ウェールズらに対して、トロツキストへの警戒を説いたのがほかならぬ呉亮平であったことを思えば、皮肉としか言いようがない⁽⁸²⁾。

呉訳本は、『赤い星』の毛沢東自述と部分と1936年に *China Weekly Review* などに載ったインタビュー記事3篇、つまり通訳の呉亮平を通して語られた毛の談話だけを翻訳し直したのだから、先の董訳本同様、英語版『赤い星』のどれとも対応しない。文革中の呉亮平は、張聞天との関係が密であったこともあり、それなりに苦しい境遇に置かれたらしい⁽⁸³⁾。恐らく、そうした日々の中で、かつて自らも深く関わった毛沢東自述が様々な形態で流布する様子を目の当たりにし、少なくとも自分が関わった部分だけでも、「正確」な版本に整理する必要性を感じたのであろう。それが1938年以降不遇な党員生活を余儀なくされた彼なりの毛沢東にたいする忠節だったように思われる。

Ⅲ 日本語版『中国の赤い星』

1 戦前日本におけるスノー著作の紹介

「はじめに」でも述べたように、戦後日本での『赤い星』の影響力は、まことに巨大であった。ただし、戦前・戦中を含めて、スノー著作の日本語翻訳史については、意外に知られていないことが多い。通常、こうした翻訳史については、訳書の「解題」「解説」や「訳者あとがき」に書いてあることが多く、名著・古典と呼ばれる本であればあるほど、詳しく書かれているはずなのだが、『赤い星』日本語版について言えば、最もあとに出た版（松岡洋子訳『中国の赤い星』ちくま学芸文庫版、1995年）でも、「訳者あとがき」は、戦後における翻訳について若干触れる程度である。文庫版にさいして付けられた加々美光行氏の「解説」も、自身の思惟の変遷を含めて、戦後日本での読まれ方に力点があり、翻訳の変遷については全く記述がない。

エドガー・スノーの名やかれの著作は、1937年に『赤い星』原書が刊行される前から、日本では——部分的にはあるが——知られていた。管見の及ぶ限り、スノーの著作の最も早い日本語訳は、大連で出されていた雑誌『新天地』1931年3月号に掲載されたエドガー・スノウ「支那に於けるボルシェヴィストの勢力」である。訳者は「啞蟬坊」だが本名は不明、スノーの身分は「ニューヨークサン特別通信員」となっている。この文章はスノーが中国の共産主義運動について書いた概論（*The Strength of Communism in China, Current History*, Vol. 33, No. 4, 1931）を翻訳したものである。もっともスノーの初期中共論といっ

でも、様々な記事を寄せ集めただけの文章で、朱徳、賀龍のほかには人名も挙がっていないような水準のものだった。かれの名が広く知られるようになるのは、やはり1936年の取材ののちである。

『赤い星』の日本語完訳は、戦後を待たなければならないが、毛沢東自叙伝や中共根拠地潜入記は、1937年あたりから日本の代表的雑誌に翻訳されていた。スノーはそれについて、1946年に書いた「日本版への序」の中で、「かつて1937年日本の一雑誌（中央公論——訳者〔宇佐美誠次郎〕）が本書を連載しはじめたが、数回出ただけ公表はたちまちに禁圧されてしまった」と述べている。スノー（及び宇佐美）がここで言及しているのは、『中央公論』1937年11月号に掲載された毛沢東「自叙伝」とスノー「行程二万五千支里」（永井直二訳）、および同誌臨時増刊（1937年12月）に掲載されたスノウ「中国共産政府の基地を衝く」（大江専一訳）のことだろう⁽⁸⁴⁾。スノーは、「数回出ただけで」「たちまちに禁圧」されたと言うが、三つの文章とも単発の掲載であり、伏せ字こそあるものの、途中で連載が禁圧されたという形跡はない。

戦前日本における禁圧を強調するスノーの証言があるせいか、スノー著作の翻訳については、それが難しかったような印象を持ちがちだが、実際には1937年だけでも（つまり『赤い星』単行本刊行前後）、かなりの文章が日本語雑誌に訳載されている。一覧表にまとめれば、次ページの表2の通りである⁽⁸⁵⁾。

この中には、外地の日本語雑誌（『上海』）や内部発行資料（外務省情報部の『情報部資料』）も含まれているが、中共支配地区に潜入し、毛沢東との単独インタビューを成し遂げたスノーが、それなりにかなりの注目を集めていたことが知れるのである。ちなみに、当時の日本の中共研究の第一人者である大塚令三も、スノーと同じ頃に「支那ソウェート地区踏破記」なる旅行記を発表している（『中央公論』1936年10月号）。だが、こちらは同年5月に杭州から南昌を経由して長沙まで、鉄道とバスで旅行しただけの記録に過ぎない。それが共産党地区踏破と題して大手雑誌に掲載されていたわけで、これが当時の現地取材の限界だったわけである。もってスノーの陝北行やその取材記事が、日本にあっても、如何に破天荒かつセンセーショナルなものだったかを知ることができよう。

2 戦前・戦中の『中国の赤い星』

では、これら記事を集成した『赤い星』はどうであったか。確かに戦前・戦中には『赤い星』の完訳は出版されなかったが、少なくとも二種の翻訳があったことが確認できる。一つは、『日本読書協会会報』214、215号（1938年8、9月）に連載された四方帰一訳「赤色支那を探る」である。『日本読書協会会報』は会員制の海外新刊書翻訳雑誌で、毎月（月

表2 1937年に翻訳されたスノーの文章

年月	雑誌名、巻号	文章タイトル	原載
1937.1	上海、965号	スノー「毛沢東会見記／中国の進むべき道は就れか」(寺内登訳)	Snow, Interviews with Mao Tse-tung, Communist Leader, <i>China Weekly Review</i> , Vol. 78, No. 11-12, Nov. 11, 14, 1936.
1937.3	上海、967号	スノー「西北ソヴェート区域を探索」(児島博抄訳)	Snow, The Reds and the Northwest, <i>Shanghai Evening Post & Mercury</i> , Feb. 3-5, 1937
1937.6	改造、6月号	スノー「中国共産党領袖 毛沢東 会見記／中国共産党の対日政策」	Snow, Interviews with Mao Tse-tung, Communist Leader, <i>China Weekly Review</i> , Vol. 78, No. 11-12, Nov. 11, 14, 1936.
1937.7	世界知識、7月号	スノー「支那共産軍の本拠を衝く」(蘆田多寧抄訳*)	Snow, The Truth about "Red China", <i>Daily Herald</i> , Dec. 31, 1936 - Mar. 17, 1937からの抄訳; 写真は <i>Life</i> , Vol. 2, No. 4, Jan. 1937より複製
1937.11	中央公論、11月号	毛沢東「自叙伝」	The Autobiography of Mao Tse-tung, <i>Asia</i> , Jul. 1937-.
1937.11	中央公論、11月号	スノー「行程二万五千支里」(永井直二訳)	Snow, Soviet China, <i>New Republic</i> , No. 1184-1185, Aug. 1937
1937.11	改造、11月号	スノー手記「毛沢東自叙伝」(長谷川了訳)	The Autobiography of Mao Tse-tung, <i>Asia</i> , Jul. 1937-.
1937.12	中央公論、臨時増刊	スノウ「中国共産政府の基地を衝く」(大江專一訳*)	Snow, I Went to Red China, <i>Saturday Evening Post</i> , Nov. 6, 1937
1937.12	情報部資料、531号	スノー「中国共産党ノ西遷」	The Red Army in Action, <i>Asia</i> , Oct. 1937; The Long March, <i>Asia</i> , Nov. 1937
1937.12	外国の新聞と雑誌、391号	スノウ「赤色支那にありて」(小田訳)	Snow, I Went to Red China, <i>Saturday Evening Post</i> , Nov. 6, 1937

* 蘆田多寧と大江專一は同一人物

刊)あたり250-300頁に3-4冊の洋書翻訳(抄訳)が掲載されていた⁽⁸⁶⁾。新刊の欧米書を選択的に翻訳・紹介するこの雑誌に、ランダム・ハウス版初版からの抄訳が掲載されたのである。分量は『会報』のページに換算して130ページあまり、それぞれの章節は相当圧縮されてはいるが、大事な記述はしっかり訳されており(伏せ字は一切なし)、中国人名・地名の同定にも、専門家の協力を仰いだ形跡がある⁽⁸⁷⁾。ただし、写真類は一切収録されず、原著の最終部“White World Again”(すなわち西安事変や中共の活動全般を展望した部分)は、翻訳されなかった。

『日本読書協会会報』が「赤色支那を探索」を訳載したさいに付した紹介者のコメントも興味深い。著者のスノーが、「排日的なジャーナリスト」であり、反国民政府・親共産党であることを紹介しつつも、

かと言ってスノーは、共産主義でも、マルクス主義でも、トロツキー主義者でもないらしい。謂はばその同情者と見るべきだらうが、然し聞くとところによると、ソ聯や米国の左翼仲間の間でも、チード的傾向⁽⁸⁸⁾を帯びたものとして、スノーの評判左程芳しくはないのださうである。

と述べ、書中に「ソ聯及びコミンタンに対する「あてこすり」」の表現が散見すると指摘していた。こうした傾向が果たして左翼党派の『赤い星』批判につながり、スノーが修訂版を出して対応したことは、先に英文諸版を検討したさいに述べたとおりである。『赤い星』を単なる潜入記や共産党礼讃記と見なすのではなく、欧米での左翼党派の文脈の中に位置づけようとする点は、この書の紹介者の深い洞察力をうかがわせる。その意味では、抄訳とはいえ、エッセンスを十分にくみ取った『赤い星』の最初の日本語訳が、限られた会員向けの雑誌に掲載されるにとどまったことは、日本にとって不幸なことであった。

日中戦争時期に出された『赤い星』のもう一つの翻訳は、さらに限られた読者のためのものであった。日森虎雄訳『中国共産党研究資料 西行漫記』（第1巻、参謀本部、1940年）⁽⁸⁹⁾である。参謀本部発行の『赤い星』訳本があるらしいことは、戦後に『赤い星』が改めて翻訳されたさい、訳者の宇佐美誠次郎が言及していた⁽⁹⁰⁾が、それがこの日森訳である。日森虎雄(1899-1945)は戦前に上海を中心に活動した中国共産党問題の専門家で、今風に言えば、中共ウォッチャー兼情報収集家である。上海にいわゆる日森研究室を設け、1934年から36年にかけて情報誌『中国資料月報』を編集・刊行したこともある。日森の翻訳は、影佐禎昭率いる情報機関、いわゆる影佐機関の依頼によって行われたものだった⁽⁹¹⁾。翻訳は英語版ではなく、中国語版『西行漫記』を底本にして行われたが、1940年末に出たと見られる第1巻は、原書の第1-4部、つまり毛沢東自述の部分までを全訳したものである。第1巻ののち、予定された第2-3巻が実際に刊行されたかどうかは定かでない（刊行には至らなかったのではないかと思われる）。

日森訳本は、あくまでも日中戦争処理のための研究資料という扱いであり、「思想的性質上一般外部には公表せざるものに付取扱ひに留意」するよう求められていた。表紙に「極秘」の二字を刻されたこの本は、そもそも流布しないように出された内部資料であり、日本の敗戦と日森の死去ののちは、ほとんど忘れ去られてしまうことになる⁽⁹²⁾。

以上述べたように、日中戦争勃発の前後、スノーの著作自体は決して禁圧されたわけではなかった。国民党と合作して日本と戦う姿勢を見せた中共とその知られざる首領とのインタビュー記録は、世界的に見ても一大スクープであり、日本でもかなりの関心と呼んだと言ってよいだろう⁽⁹³⁾。ただし、『赤い星』の全訳を許すような寛容性は、日中戦争の泥

沼化と思想統制の強化の中で、出版界から急速に失われてしまう。1938年であれば、会員向けという限定付きながら抄訳が刊行される余地はあったものの、その2年後には——むろん参謀本部という特殊な発行元という要因はあるが——「一般外部には公表せざるもの」という指定を受けるにいたる。俗に「敵を知り、おのれを知らば、百戦殆うからず」という。また、そもそも日本が中共をどの程度まともな敵として見なしていたかは議論が分かれようが、いずれにしても、『赤い星』の翻訳史を見る限り、日本は敵をよく知らぬまま、中国との戦争を続けていたと言えそうである⁽⁹⁴⁾。

3 戦後日本の『中国の赤い星』

大状況としては、中共を敵と見なす政治状況は、敗戦後も日本では変わらなかった。占領下の日本では、今度はアメリカの意向によって、中共の動向や歴史を好意的に紹介する文章や書籍に、様々な制限・圧力が加えられたからである。『赤い星』の翻訳も例外ではない。戦後日本で『赤い星』の翻訳に着手したのは、戦時中から原書を愛読していた社会経済学者の宇佐美誠次郎（1915–1997）だった。失業中だったかれは、戦争が終わると友人杉本俊朗と『赤い星』の翻訳にかかり、早くも1946年末に『中国の赤い星』上巻を東京の永美書房から出版した（底本は原著1944年版。翻訳に当たっては『西行漫記』を参照。スノーは「日本版への序」を寄せている）。だが、上巻の刊行後にGHQの検閲・規制を受け、下巻は校了まで行ったものの、結局公刊を許可されなかったという⁽⁹⁹⁾。

ただし、完成していた下巻の訳稿は、どうやら内々に刊行されたようである。「中国文芸愛好会」の名義で出された『中国の赤い星』（裏表紙に「非売品、会員配布価格180円」とある以外、訳者や出版社、発行日など書誌に関する情報はなし）がそれである。この『赤い星』には、上巻とも下巻とも表示されていないが、内容は宇佐美・杉本訳『赤い星』の下巻に相当している。他方で、宇佐美は占領終結後、1952年に改めて筑摩書房から『赤い星』の全訳を刊行するが、その後半部分の訳文は、中国文芸愛好会の『中国の赤い星』と一致する。これによって、いわゆる中国文芸愛好会版の『赤い星』は、検閲規制によって公刊できなくなった宇佐美・杉本訳『赤い星』の下巻を非売品扱いにして、有志に頒布したものであることがわかるのである。

附言すれば、この上巻に対して書かれた学術雑誌の書評（岩村三千夫執筆、『歴史評論』1947年5月号）も、同様にGHQの校正段階の検閲により、部分的に削除されるほどだった⁽⁹⁶⁾。さらには発禁が原因で、出版元（永美書房）も倒産してしまったと言われる⁽⁹⁷⁾。これが占領下の新生日本での『赤い星』の境遇であった。その後、占領が終わった1952年、『赤い星』はようやく晴れて完訳公刊の時を迎える。筑摩書房刊の宇佐美誠次郎訳『中国

の赤い星』である。底本は永美書房版と同じく1944年版、かな遣いは改められているが、中身は先に触れた通り、永美書房版・中国文芸愛好会版と全く同じである。宇佐美訳としては、その後同じ筑摩書房から1964年に『新版 中国の赤い星』が出ているが、底本を変えた新訳ではなく、旧訳の誤訳を若干改めた程度に過ぎない。

1968年に英語版『赤い星』の拡大修訂版が出ると、日本でもそれに合わせて改訳版が出た。1972年に筑摩書房より出版された『エドガー・スノー著作集』の第2巻『中国の赤い星』（増補改訂版）である。この「増補改訂版」、出版元は引き続き筑摩であったが、訳者は松岡洋子に替わった。本来なら、前回同様に宇佐美が翻訳に当たるべきところ、そうはならなかったのには、文化大革命以来の日本の日中友好運動の分裂が影を落としていたと見なければなるまい。すなわち、1960-70年代に、毛沢東の著作やスノーの名著などは、中国に近い（すなわち文革を支持する）立場の人間が翻訳に当たるべきだとの空気が、日本の出版界・文化界に広がった結果、それまでに『目覚めへの旅』や『今日の中国：もう一つの世界』といったスノー著作を翻訳したこともあり、かれと面識もあった松岡が、中国により近い友好人士として『赤い星』の翻訳を担当することになったのであろう。

当然に、宇佐美はこれに不満であった。後年のインタビューのさいにかれは、「関係者が「正統本部」以外のものにスノーの翻訳を許すわけにいかん、というのかもしれませんが。私はいまだにまったく了解していません」と述べ、「正統本部」すなわち日中友好協会（正統）の関係者であるか否かが訳者変更の原因であったと見ている⁽⁹⁸⁾。筑摩の『エドガー・スノー著作集』は、スノーの死去をうけ、日中国交回復の1972年、まさに中国ブームのさなかに企画・出版されたものである。そのさい、この名作の晴れの翻訳者は、革命中国の理解者にして長年日中友好運動に取り組んできた人間でなければならなかったのだろう。そうした当時の空気の中、『赤い星』は文革を経てなおも生き続け、発展している中国革命の今を知るために読むよう期待されていた⁽⁹⁹⁾。

前述のように、この松岡訳『赤い星』（増補改訂版）は、当時の原書最新版、すなわち1968年版を底本として翻訳されたものであった。翻訳にさいしては、既訳（つまり宇佐美訳）が参照されたに違いないが、松岡訳本ではそれが曖昧にされている。「これまでの訳書」という言い回しはあっても、それが誰の訳なのか、どこから何時出版された本なのかについては、まったく口をつぐんでいるのである。上述の理由による訳者変更は、一般読者には説明しにくいものであったか、あるいは革命中国に対する見解・立場を異にする前訳者の名前など出す必要はないと考えたか、そのどちらかであろう。

ただし、松岡訳は宇佐美訳を乗り越えられない弱点を抱えていた。中国人名・地名を同定する上で決定的に重要な中国語版『西行漫記』を、宇佐美は持っていたのに対し、松岡

は持っていなかったのである⁽¹⁰⁰⁾。かくて、松岡はそうした漢字名を同定する場合、多くを宇佐美訳に依拠せざるを得なかった。漢字名ばかりではない、松岡は「訳者あとがき」で『赤い星』の英語諸版の解説をしたさい、宇佐美の「訳者あとがき」の該当部分をそのまま書き写したため、宇佐美の誤記⁽¹⁰¹⁾までそのまま引き写してしまっていた。

松岡訳はその後、小改訂の上で『中国の赤い星（増補決定版）』と銘打たれ、1975年に筑摩叢書の一冊として単行本発行された。この時期には松岡も『西行漫記』を入手していたようだ⁽¹⁰²⁾が、誤訳、誤記を若干訂正し、いくつかの訳注や人名索引が追加されたぐらいで、訳文や内容は、ほぼ1972年の「増補改訂版」と同じである。このほか、この増補決定版に到って、「訳者あとがき」で既訳に宇佐美訳があることがようやく明示された。ただし、宇佐美「あとがき」の誤記をそのまま引き写している点は、この増補決定版でも、のちの「ちくま学芸文庫版」（1995年）でも改まっていない。こうした点を見る限り、日本での『赤い星』は、版本の違いや邦訳の経緯などに無頓着なまま、原作の精神を感得することに主眼を置いて、つまりはある種の經典として読まれてきたと言えるだろう。

IV ロシア語版『中国の赤い星』

ソ連ではスノーの著作以前に、中共の活動に関する書籍・資料集、あるいは毛沢東の伝記も何種類か発表されていた。モスクワに総本山を置くコミンテルンの広報・宣伝活動の一環として、とりわけ1935～36年には、コミンテルン第7回大会や中共創立15周年に合わせ、積極的な宣伝の取り組みがなされたからである。中共党史の関連書としては、代表的なものに、ミフ（Pavel Mif）の『中国共産党の英雄的奮闘の十五年』（1936年）⁽¹⁰³⁾があり、毛沢東の伝記としては、ロシア人の中国研究者エレンブルグ（G. B. Ehrenburg）やジャーナリストのハマダン（A. M. Khamadan）の書いた略伝など⁽¹⁰⁴⁾が、また長征にかんしても、『プラウダ』や『インプレコール』には、随時関連記事が載った⁽¹⁰⁵⁾。スノーの『赤い星』以前、中共やその首領に関する情報といえば、モスクワで編纂されたこうしたコミンテルン関連刊行物によるほかなかったわけだが、何と言っても強い党派性を持ったものだけに、国際的に共有されるには、ほど遠い性質のものだった⁽¹⁰⁶⁾。

こうした意味では、スノーの取材記事や『赤い星』は、ソ連・コミンテルンにしてみれば、宣伝活動における強力なライバルの出現でもあった。ましてや、スノーの陝北への取材行は、そもそもソ連・コミンテルンのあずかり知らないところで決行されたものだった⁽¹⁰⁷⁾し、かれの世界情勢観や政治的立場も、ソ連流の社会主義とは隔たりのあるものだったから、スノーの報道は、ソ連・コミンテルンにとって、必ずしも渡りに船とは言えない

側面を持っていたのである。ソ連やスターリンへの棘を含んだスノーの文章が、ソ連でそのまま翻訳されることは期待できなかった。

ソ連で最初に報じられたスノーの取材記は、1937年12月15日発行の雑誌『国外』（3а рубежом）に掲載されたスノー「毛沢東」であった⁽¹⁰⁸⁾。『国外』はモスクワで発行されていた海外時事評論雑誌（旬刊）で、それまでも毛沢東伝（1934年第31号）や毛沢東の第2回中華全国ソヴィエト代表大会での報告（1934年第27号）などを掲載したことがある。『国外』に載ったスノー「毛沢東」（訳者無署名）は、1937年の『赤い星』ゴランツ版からの抜粋訳で、具体的には第3部第1章（「ソヴィエトの巨頭」）と第4部（「ある共産主義者の来歴」——すなわち毛沢東自述——の1929年前後の部分まで）の抄訳で、分量はわずか2ページに過ぎない。文章に付けられている注記は、「*Daily Herald* 上海特約記者の新著の抜粋」という極めて簡単なもので、その新著のタイトルや出版地などはもちろんわからないし、スノーの取材の経緯も完全に伏せられていた。

内容に目を向けると、毛沢東の生年や出身地、生い立ちなどの基本的な事柄は、スノーの文章のまま翻訳されているものの、共産黨員となつてのちの具体的活動については省略が多く、とりわけ党内問題や党指導者の誤り（陳独秀、李立三）についての部分は、まったくと言ってよいほど訳出されていない。中国革命に対するソ連やコミンテルンの指導の是非にかんする点もまったく省かれていることは言うまでもあるまい。この最初の翻訳は、その意味で、まさにソ連流の「抜粋」であった⁽¹⁰⁹⁾。ちなみに、当時ソ連では国家を挙げでの百科事典（『ソヴィエト大百科事典』）の編纂・刊行が進行中だったが、1938年刊行の第38巻に配された「毛沢東」の事項記述（90-91頁）は、『国外』に載ったこの「毛沢東」に拠っている。

1 ロシア語版『中国の英雄的人民』（Героический народ Китая）

ソ連流の抜粋は、スノー『赤い星』の露語版単行本が刊行されたさいにも発揮されている。露語版単行本は1938年にモスクワで、スノー著『中国の英雄的人民』というタイトルで発行された（ミルツェヴァ〔L. Mirtseva〕訳）⁽¹¹⁰⁾。この露語版の出版は、スノーの同意を得ることなく行われたものだった。後年、それを知ったスノーは、『『中国の赤い星』の削除訂正版が、私の了解もなくモスクワで出版されたが、それには西安事変、コミンテルン、ソ連および全ての“問題”箇所が削られていた」と嘆くことになる⁽¹¹¹⁾。スノーのいう“問題”箇所の扱いとは、具体的に言えば、次のようなことだった。

450頁を超える『赤い星』原書は、ロシア語版では100頁あまりに圧縮、章立てなどの構成も大きく改変され、「統一戦線」の重要性が露骨に強調されていた。原著の目玉とも

いべき毛沢東自述は、終章「中国人民の息子」⁽¹¹²⁾に回され、大幅に圧縮されるばかりか、「鋼鉄の意志」を持つほかの紅軍指導者たちの人物紹介と一緒にされてしまうありさまだった。毛沢東の共産党員としての活動にかんする記載は、1頁にも満たず、その半面、スターリン著作からの引用だけは、しっかりと加筆されていたのである。同書が『中国の赤い星』という訳書名を冠せなかったのも無理はない。

このいわく付きのロシア語版に関連して、『冒険の季節』の著者トーマスは、ソ連の新書案内『図書ニュース』（Книжные новости）の1938年の記事の調査に基づき、この削除訂正版とは別に、『赤い星』のまっとうな露語版も計画されたふしがあると述べている⁽¹¹³⁾。この計画は、トーマス氏も言うように、結局実現せず、その後半世紀もの間、ソ連ではスノーの著書は刊行されぬままとなるのだが、1938年の時点でその実現を阻んだのは、先に英語版の章で述べたアメリカ共産党ではないかと見られる。すなわち、ソ連で翻訳すべき英語図書の選定に当たっていた国家出版社（レニングラード）の担当者が1938年9月に「アメリカ共産党駐コミンテルン代表」に対して、スノーの著作などをリストアップして、その著者たちの政治的立場などを問い合わせているが、それにたいしてアメリカ共産党代表は、スノーの「トロツキスト的傾向」を理由に、スノーがそうした偏向を脱したと証明されるまで、「かれの著作は一冊たりとも翻訳すべきではありません」と回答していたのである⁽¹¹⁴⁾。かかる烙印を押された以上、ソ連でスノーの本がそのまま出ることあり得なかっただろう。

2 出版されぬままのロシア語版『中国の赤い星』

その後、ソ連がスノーに貼ったレッテルは、1940年代末からは、チトー主義者、もしくは中ソ離間を企む者、その後に中ソが対立すると、一転して中国シンパの毛沢東主義者へと転じていったが、レッテルがいずれであっても、政治の国ソ連でその著作が翻訳するのに不適切であることに変わりはない。かくて、ソ連崩壊後に今度は革命中国への関心をよくも悪くも失ったロシアでは、『赤い星』の露語版は出版されぬまま、今日に到るのである。

ただし、原書『赤い星』が刊行された1930年代末の時点では、ソ連やコミンテルンにとって、問題があるのはあくまでもスノーであって、決して毛沢東が憎いものではなかった。それどころか、コミンテルンに忠実なる中共の指導者として、あるいは国共合作体制で日本帝国主義と戦う中国人民のリーダーとして、ソ連は毛沢東の存在を積極的に宣伝しようとしたし、現にいくつかの毛沢東伝も刊行されている。皮肉なのは、そうした毛沢東伝を発表しようとするれば、どうしてもスノーの取材記に拠らざるを得なかったということであ

る⁽¹¹⁵⁾。いくつか例を挙げよう。

1939年には、その名も『毛沢東——略伝』という伝記がモスクワの国家政治図書出版社から刊行されている⁽¹¹⁶⁾。この評伝は分量にして101頁、書中いたるところに毛沢東にたいする共産党流の賛美の言葉が見える。曰わく「傑出した革命指導者にして、天才的戦略家」、「全身全霊で人民のために尽くす者」等々。その大げさな賛辞に釣り合わせるかのように、本そのものも青のクロス張り表紙、その上に赤字白抜きの漢字で「毛澤東」の三文字が配されているという豪華な作りで、『赤い星』由来の写真も多数収録されていた。この書の中核をなす毛の半生の記録——もちろん、モスクワの都合の良ように脚色されていた——が、『赤い星』の毛沢東自述に依拠したものであったことは、言うまでもない。もっとも、前述のように、スノーの名前や『赤い星』の詳細を示すことは好ましからぬことだったから、本書のなりたちについては、単に「1936年にあるアメリカ人記者が記録した毛沢東の談話を基礎とした」伝記と説明していた⁽¹¹⁷⁾。

この『毛沢東——略伝』と同じ1939年にコミンテルンの機関誌『コミュニスト・インターナショナル』に掲載された伝記「毛沢東」⁽¹¹⁸⁾も、スノーや『赤い星』の名を挙げないものの、同書の情報を援用して書かれたものである。著者署名はチュアン・シュン（Чуан Сюн）だが、本名はわからない。この伝記も、スノーの取材に依拠した部分については、単に「毛沢東が自ら語るところによれば」、あるいは「毛沢東としばらく生活を共にしたことのあるアメリカの記者によれば」と記すにとどめる一方、毛沢東を形容するに、「鋼鉄の意志を持つ」「真のポリシェヴィキ」、「中国人民の忠実なる息子」といったお決まりの枕詞を連発していた。これが、コミンテルンにとっての、つまりはソ連にとっての望ましい毛沢東だったわけである。ともあれ、こうしたソ連での一連の毛沢東伝の発表を見る限り、スノーに対する評価はさておき、毛を中共の最高指導者として尊重するソ連・コミンテルンの意向は、遅くとも1930年代末には、すでに確固としたものになっていたと言わざるを得まい。

毛沢東とコミンテルンといえ、往々にして後者は毛の土着的活動様式や運動方針を嫌い、毛を抑圧してきたと言われる。毛沢東自身もそうした被害者認識を持っていたことはよく知られている。当のスノーもこうした見方をしていた一人で、後年になってからだが、1936年の取材のさい、毛沢東の口からスターリンに対する不満を聞いたとして、「1934年に初めてモスクワは、しぶしぶ指導者としての毛を認めたのである」と結論づけている⁽¹¹⁹⁾。この1934年が何を指しているのかは判然としないが、かりに1934年初めの第2回中華全国ソヴィエト代表大会で毛が中央政府主席に再任されたことを指すとすれば、実際にはそれを待つまでもなく、モスクワは毛沢東の実践活動に高い評価を与えていたことが、

近年ようやく明らかになっている。毛を押さえつけようとしたのは、コミンテルンやスターリン、あるいはモスクワにいた王明らではなく、秦邦憲ら中国現地のライバルたちであった⁽¹²⁰⁾。

その意味では、長らく流布してきた毛沢東とコミンテルン（ソ連、スターリン）の不一致、不和を強調する語りや認識のある部分は、『赤い星』で暗示されたスノーの見解によって形成されたと言ってもよいだろう。スノーは、中国の共産主義運動をソ連流の共産主義と区別する見解をその後も持ち続けるわけだが、あるいはそうした考え方が1936年の毛沢東への取材を通じて強められ、また逆に毛沢東もスノーのそうした考えを自らの認識に組み入れていくという相互増幅作用が起きたと言ってもよいかも知れない⁽¹²¹⁾。むしろ、それはモスクワにとっては、到底受け入れることのできない毛沢東像であった。

以上にまとめた『赤い星』の各国での出版、翻訳の歩みとその背景を見れば、この名著がそれぞれの時代に受けた評価が、決して一様ではなかったことが知れよう。とりわけ、「革命」を掲げる勢力から受けた評価は、決して称賛ばかりではなく、むしろ非難の声が混じることもしばしばなかった。『赤い星』の置かれた境遇がかくも大きく変動したことは、それだけこの書の影響が巨大であったことの逆説的な証しだと言えよう。

V エドガー・スノーの取材——書かれざる人々——

『赤い星』の中で、スノーはどのような準備を経て1936年の中共地区潜入を実現させたかについて、つまり取材の経緯を終始できるだけ曖昧にしている。むしろ、これは当時かれの取材を支援してくれた関係者に累が及ぶのを避けるためであって、今日流に言えば、取材源の秘匿というジャーナリストとしての倫理によるものである。だが、時が過ぎ、中共の天下が実現した後になっても、スノーは潜入の詳しいいきさつを明かすことに消極的だった。また、いくらか内幕めいたものを明かすことがあっても、それは必ずしも事実のままではなかった。

これにはいくつかの理由が考えられる。まずもって考慮すべきは、『赤い星』が再刊されなくなった1949年以降の中国に暮らし、とるに足らない経歴の傷によって政治運動に翻弄される恐れがあった取材協力者への配慮ということである。次いで指摘しておくべきは、スノー自身が、こうした秘匿をする中で、半ば誤った記憶に浸ってしまったという点である。これに関しては、当時かれの取材活動でのパートナーでもあったニム・ウェールズも、取材の経緯に関するスノーの記述には、問題や誤りが多いことを指摘している⁽¹²²⁾。かくて、『赤い星』に登場するスノーは、あたかも単身で赤匪の巢窟に乗り込む冒険家ジャー

ナリストのような印象を読者に与えることになった。だが、実際は決してそうではない。

1 同行者ジョージ・ハテム

スノーが陝北の中共根拠地に潜入した時、もう一人外国人の同行者（青年医師のジョージ・ハテム〔George Hatem〕）がいたことは、長らく秘密にされていた。レバノン系アメリカ人であるハテムは、スノーの取材ののちも中共地区に留まり、そのまま中国共産党員（中国名：馬海德）となって、人民共和国の衛生医学に生涯を捧げることになるが、自分が同道した事情を公表しないよう、スノーに依頼したからである。ハテムが同行していたことは、スノーの1960年の訪中後に書かれた『今日の中国』（1962年刊）でようやく明らかにされ⁽¹²³⁾、その後ハテム自身も回想録でそれを認めた⁽¹²⁴⁾。

また、スノーとハテムは、実は1936年7月の陝北行以前に、同年春にも一度陝北への潜入を試みて、失敗していたらしい。スノーは『赤い星』でも、後年の回想録や関係著作の中でも、最初に試みたその潜入が失敗したことに、まったく言及しなかった。スノーとハテムが1936年3月ごろに陝北への潜入を試みて、一度失敗していたことは、ハテムが1980年代に回想録でそれを示唆していたが、近年出版されたいくつかの資料から、ようやく知られるようになってきたことである⁽¹²⁵⁾。

スノーとハテムの陝北行については——これはスノーの取材準備ともかかわることだが——かれらが偶然の同行者だったのか、あるいはどちらかが潜入の主導者だったのかについて、二人の見解は分かれている。スノーは1960年に北京を訪れて旧友ハテムと語り合い、その後1962年に刊行した著書で同行者ハテムの存在をようやく明かしたが、同書では、二人は1936年6月に西安のホテルではじめて出会い、ともに事前に指定された使者（王という姓の牧師）の来訪を待ったと記している⁽¹²⁶⁾。記述は相変わらず曖昧なままである。

一方、ハテムは1936年6月にスノーにはじめて出会ったのは、西安に行く途中の鄭州駅だったと述べる一方、別の回想では上海ですでにスノーに会っていたと述べるなど、記憶に大きなブレがある⁽¹²⁷⁾。また、ハテムはその前の3月に一度陝北潜入を試みて不首尾に終わったことを振り返っているが、そこにはスノーは登場しない。このほか、スノーと自身が選ばれた経緯についても、

当時、西北にいた紅軍から、信頼できる外国人ジャーナリストと医師が必要だというメッセージが届いた。外国人ジャーナリストとして選ばれたのがエドガー・スノーである。医師については、特に信頼できるという条件がなかったので、わたしに白羽の矢が立った。⁽¹²⁸⁾

と述べる一方で、別のインタビューでは、共産党に関わっていないスノーよりも、上海で中共の活動に加担していた自分の方が信頼されていたはずで、医薬品の入った自分の荷物の底には、中共中央に届ける秘密文書が入っていたとも記している⁽¹²⁹⁾。また、スノーの回想については、「〔スノーは〕面白くするために、しばしば物語を大げさにした。……必ずしも正確ではないが、悪意はないので、私たちは大目に見てきた」⁽¹³⁰⁾という。

つまりは、中共との接触経緯をつとめて曖昧にしようとするスノーと、時々相矛盾する内容を繰り返すハテムの証言を比較検討しても、せいぜい上海の宋慶齡とアグネス・スメドレー (Agnes Smedley) が二人の潜入にかなり便宜をはかったらしいことがわかるだけで、それ以上のことは確定できないのである。恐らくは、かれら二人も自分たちが如何なるルート・人脈の中で潜入しているのか、正確には把握していなかったのではなからうか。

いずれにせよ、陝北に残ったハテムは、単に医療活動に従事するだけでなく、スノーの帰還後しばらくの間、陝北から随時北平のスノーに情報を送る取材協力者となった。紅軍とともに行軍する自らの日記やスノーの取材記事にたいする中共側の注文や訂正要求などをハテムが送っていたことが確認できる。また、1936年12月の西安事変勃発直後の中共の対応も、ハテムを通じてスノーに伝達され、スノーの事変報道や評価に一定の影響を与えたと考えられる⁽¹³¹⁾。

2 劉鼎と馮雪峰

スノーとハテムが詳しい経緯も知らぬまま運ばれる「洋客」であり、その潜入を認めたホストが中共中央だったとするならば、その間に立って事を運んだのが、上海の共産党連絡員の劉鼎と馮雪峰だった。潜入に到るまでのスノーとハテムの曖昧模糊たる説明は、劉・馮の側の資料により、ある程度補正することができる。

二度にわたってスノーらの陝北入りを斡旋した劉鼎の語るところによれば、スノーとハテムの二人は、とにかく共産党地区に入って取材をしたいという動機から、宋慶齡らに働きかけ、1936年3月下旬ごろに、宋のもとに出入りしていた劉と同道して西安に向かったのだった⁽¹³²⁾。劉鼎(1903-1986)は中共が張学良のもとに送り込んだ連絡員として、レウィ・アレイ (Rewi Alley) と協力しつつ、上海—西安—陝北間の文書、人員、物資の秘密輸送(今日流に言えば、ロジスティクス)を担当していた人物である。この劉鼎も、その身分と当時の任務の性質ゆえ、スノーの『赤い星』には、全く登場しない⁽¹³³⁾。劉の回想によれば、かれは本来、西安からスノーらを手引きして陝北へ潜入させる手はずだったが、急遽セッティングされた張学良と周恩来の秘密会談(4月9日夜、延安)に陪席するため西安を離

れざるを得なくなり、そのために連絡係を失ってしまった二人の外国人は、数日待ったのち、空しく西安を引き上げたのだった⁽¹³⁴⁾。こうした一連の経緯から見ると、この最初の潜入は、事前の調整を充分にはからぬままなされた、一種の突撃取材の試みに近いといえそうである。

だが、スノーとハテムはその失敗にめげなかった。かれらはいったん上海（北平）にもどり、宋慶齡らを通じて再度取材の希望を伝えた⁽¹³⁵⁾。かれらにとって幸いだったのは、一方で延安秘密会談を終えて周恩来と瓦窖堡（陝北の中共中央所在地）に赴いた劉鼎が、かれらのソ区訪問希望を4月13日に党中央に報告してくれたこと⁽¹³⁶⁾、他方で馮雪峰（統一戦線工作、文化工作担当の党幹部、1903-1976）の上海への派遣に見られるように、この時期（1936年4-5月）に陝北と上海の連絡体制がようやく整ってきたことである。そしてまさにこの時期、スノーらの陝北行きに関連する中共側の記録がようやく現れることになる。

まずは、中共中央政治局の5月15日の会議記録に、外国人記者からの書面質問状への回答案に関する議論が見えることである⁽¹³⁷⁾。その議事録には、記者の名前は見えないが、中共の対外政策にかんするその質問状の内容が、後のスノーのインタビュー内容と重なる⁽¹³⁸⁾ことから見て、その「外国人記者」がスノーにはかならないこと、つまりは、遅くともこの時期までには、スノーの取材希望が確実に中共中央のもとに伝達されていたことが確認できるのである。

スノーらの二回目の潜入経緯をうかがわせるもう一つの中共側資料が、5月28日付けで上海の馮雪峰が陝北の中共中央（張聞天、周恩来）宛てに執筆した報告書である。この報告書は、様々な極秘活動のために陝北から上海に派遣されていた馮が作成した最初の報告だが、その中でかれは、ハテムとスノーの名前を挙げて、かれらのソ区訪問希望を伝え、その受け入れ準備をするよう要請していた。関連部分は以下の通りである。

前次要進来之外国医生堅決要来，現在已送来，他的名字叫 S・G・Hattem，另有一个叫 Edgar Snow 的美国记者亦来，此人系来參觀，三月後即要出来，此二人均十分熱情並十分可靠，尤其是医生他買了三四百元的藥帶來……收到此信後，即刻請派人到延安接兩個外国人——Hattem 與 Snow，他們六月三日從滬動身，估計六月十三四日一定可到延安。⁽¹³⁹⁾

この報告書からわかることは多い。まず、ハテム、スノーともに信頼の置ける人物と評価されているが、スノーの訪問が3カ月の「參觀」⁽¹⁴⁰⁾、つまり期限のある視察、取材であ

るのに対し、以前からソ区入りを希望していたハテムの方は、どうも中共の活動に身を投じたいというような、より強い熱意——その証しが多額の医薬品——を示していたと思われることである。また、この報告が事実を伝えているとすれば、スノーとハテムは上海から同道したことになる。つまり、二人が初めて会った場所を鄭州、あるいは西安とするハテムやスノーの記憶は、ともにあてにならないということになるわけである。

ただし、一方で馮の報告には不可解な点も残る。まずは、ハテムについては確かに以前からソ区入りを希望していたということが裏づけられるが、スノーに関しては（前述のように、劉鼎らの語るところによれば、スノーも以前にソ区入りしようとして失敗しているのだが）、必ずしもそのようには書かれていないという点である。また、スノーは取材希望（質問事項）をこれ以前に中共中央に提出しているのに、馮はそうしたことについて関知している様子がないこと、また劉鼎の介在もあったに違いないが、それもこの報告書の部分からはうかがわれないこと、などである。

むろん、馮雪峰が単に知らなかったということなのかもしれないが、この資料の問題点は、公表されているのが報告書の一部であり、全文の公表が控えられているという点である⁽¹⁴¹⁾。上記の引用部分でも、ハテムが「三四百元分の薬を買いそろえてきた」に続く文章が省略されているが、この省略部分に書いてあることが公表されないことには、馮がスノーとハテムの潜入をどう見ていたのかを断定することはできない。ともあれ、これまで魯迅との接触ばかりが強調されてきた馮雪峰がスノーらの派遣にも関わっていたことは、この資料によって初めて明かされる事実である。

『劉鼎伝』の収録する資料（党中央と劉との往来電）によれば、1936年6月12日に西安の劉鼎が陝北の周恩来に宛ててスノーらの到着を告げ、追ってスノーらをソ区入りさせると報告している（249頁）。だが、その直後に中共中央の所在地だった陝北の瓦窑堡が失陥する（6月21日、中共中央は保安に移動）などの混乱があったため、スノーらのソ区入りは遅れに遅れ、延安から匪賊地帯を抜けてソ区に入ったスノーらが安塞県の白家坪で周恩来に面会したのは、それから1カ月近くもたった7月9日のことだった。周恩来はかれらを出迎えるために、前日に現地入りしていた（251頁）。スノーらのソ区訪問は、保安の住人には事前に通知されたようで、到着予定日だった7月12日には朝から大勢の人が街に出て終日二人の「洋人」の到着を待った。街はスノーらの来訪を前にきれいに掃除されていたが、結局その日二人は現れず、到着は翌13日となった。二人は小さな保安には不似合いなほどの大歓迎の人並みの中、中共中央の所在地に入った⁽¹⁴²⁾。中共連絡員劉鼎はその後、秋にスノーを追って西安にやって来たニム・ウェールズのソ区潜入を斡旋したり（ただし、その時は条件が整わず実現せず）、スノーが取材を終えてソ区を離れる際には、

再び交通手段を確保してその脱出を助けたり（252-254頁）と、まさにスノーの取材成功の陰の立役者であった。

取材協力者たる劉鼎と馮雪峰の名が、『赤い星』の初期の版に登場しないのは当然としても、その後に改訂を加える機会がありながら、スノーがかれらの名前を出さなかったのは、ひとえに劉・馮の人民共和国での境遇をおもんばかってのことであった。馮が新中国の文芸界において、当初こそ中国作家協会副主席、人民文学出版社社長などを歴任したものの、その後の胡風事件、文革など相次ぐ文芸迫害の中で、右派、叛徒とされたことは改めて言うまでもなからう。

一方、劉鼎も第二機械部副部長の職にあった1953年に、突如理由のハッキリしない処分（副部長職解任、2年の留党察看処分）を受け、以来エンジニアとして現場の仕事に従事、やがて文革が起こると、様々な過去の経歴（中央特科での活動歴や逮捕歴、あるいは張学良のもとで連絡員をつとめたことなど）を指弾され（叛徒、特務）、ついに7年にわたって秦城監獄へ収監される羽目となった。むろん、スノーとて人民共和国での劉鼎の境遇に決して無関心であったわけではない。1970年に訪中したスノーは、周恩来と1936年の思い出話をしたさいに、劉鼎は今どうしているのか尋ねている。周は何も答えなかった⁽¹⁴³⁾。その無言の答えの意味を、スノーはただちに察したに違いない。かかる状況の中、スノーが1936年の劉鼎に言及することは、何ら劉のためになることではなかった。スノーは、劉の消息を知ることなく世を去ることになる。

劉鼎は1975年に秦城監獄を出たあと、特に改革・開放の時期には、自身も関わった西安事変などに関する歴史書の編纂にたずさわり、朱徳など同志にまつわるいくつかの回想録を書いているが、スノーの陝北潜入を助けたことを積極的に公言することはなかったようである⁽¹⁴⁴⁾。かれがスノーの取材を陰で支えたという事実は、1985年ごろに同じ病院に入院していた劉鼎とアレイをたまたまハテムが見舞った際に、三人の昔語りで言及され、ようやく明らかにされたことらしい⁽¹⁴⁵⁾。

3 宋慶齡（いわゆるX）と王牧師（董健吾）

スノーの陝北行を支援した重要人物として宋慶齡（孫文夫人）がいることも、スノーは『赤い星』で言及しなかった。支援者としてばかりでなく、宋慶齡の名そのものも、1968年の改訂版に至るまで、『赤い星』の本文には登場しなかった⁽¹⁴⁶⁾。スノーが宋慶齡の支援を受けたことをあきらかにしたのは、1958年に発表した自伝においてである⁽¹⁴⁷⁾。実はスノーは、陝北潜入以前に上海で、伝記執筆を前提に何度か宋慶齡にインタビューを行い、彼女を通じて中国を知るとともに、大きな影響を受けてもいた⁽¹⁴⁸⁾。だが、「自己の見解を

おおよけに発表することができない」という宋慶齡をとりまく民国当時の状況下では、彼女の言葉は、彼女がスノーの中共取材に便宜を図ったという事実ともども、到底公表することはできなかったのである。

本来であれば、そうした制約のなくなった1949年以降なら、スノーは比較的自由に宋慶齡のことを書けたはずである。前述の馮雪峰や劉鼎と違って、宋慶齡は孫文の革命の遺志の化身であり、人民共和国副主席という高位にあるのだから。確かにスノーは自伝の中で、「彼女の立場がはっきりした今日、彼女の信頼を裏切ることなしに、当時の彼女について若干のべることができる」と考え、かつて「公表しない建前でメモした」いくつかの宋慶齡の言葉を公表している⁽¹⁴⁹⁾。だが、「立場のはっきりした」のちであっても、スノーがありのまま彼女の当時の言葉を伝えることは、決して好ましいことではなかった。具体的に言えば、宋家の家族に関すること、孫文が生前にキリスト教式の葬礼を望んだこと、トロツキー批判をしたスノーに対して、彼女がトロツキーの新著『裏切られた革命』を渡し、「多くの真実が書いてある」から読むよう勧めたことなどである⁽¹⁵⁰⁾。スノーはこれくらいの事実であれば問題なだろうと考えて公表したのだろうが、それを読んだ宋慶齡からその後に寄せられたのは、訂正を要求する抗議だった。

宋慶齡の抗議書簡そのものは公表されていないが、1959年にニム・ウェールズら外国の友人に宛てた書簡（期日未詳）の中で、彼女はスノーが最近の本（すなわち *Journey to the Beginning*）で自分の言葉を誤って引用しており、その態度は誠実でもなければ友好的でもないと批判している⁽¹⁵¹⁾。宋慶齡からの抗議を受けたと見られるスノーは、1960年8月16日付で宋慶齡に弁解、謝罪の書簡を送り、以後の修正を約束したが、それを果たさぬまま死去、その後さらに宋慶齡は外交ルートを通じて修正を求めたが、結局彼女の願いはかなわなかったという⁽¹⁵²⁾。当時の中国の状況下では、スノーの自伝の中国語版が出版される可能性はほぼなかっただろうが、仮に英語であっても、スノーから人民共和国の歴史認識と齟齬する語りがもれることは、国家副主席たる宋慶齡にとっても不都合なのであった⁽¹⁵³⁾。

他方、スノーも宋慶齡の証言によって得られた衝撃的事実を公表するさいには、かれなりに慎重な配慮をしていた。西安事変解決の舞台裏について語った宋慶齡の言葉を「“X”との対話」と題して匿名にしたことである。すなわち、1957年に出版した『中共雑記』において、スノーは“X”から1937年11月に聞いた話として、西安事変解決の鍵は、蒋介石の釈放を命じるスターリンから中共への指令（それは“X”自身が転送した）であったこと、当初蔣を裁判にかけるともりだった毛沢東は、その指令に怒り狂ったものの、最終的にそれに従わざるを得なかったことを明かしたのだった⁽¹⁵⁴⁾。

今日では、モスクワの意向を受けて中共が蒋介石解放・平和解決に方針転換をしたことは、大筋では確認されている（ただし、宋慶齡が指示電を転送したことは疑問視されている）⁽¹⁵⁵⁾。スノーは、この証言を——毛沢東と“X”に配慮して——『赤い星』にも盛り込まず、30年間秘したということになる。もっとも、この“X”が宋慶齡であることは、『中共雑記』の翌年に出版された自伝の記述⁽¹⁵⁶⁾と照らし合わせて読めば、容易に推定できるようになっていたため、この点も宋慶齡の不興を買った可能性はあろう。スノーは、それら新著の出版後1959年はじめに、宋慶齡を含め何人かの英語を読める中国の友人に献本したのに、何のレスポンスもないと嘆いている⁽¹⁵⁷⁾。これも当時の中国の政治状況から見れば、ややナイーブに過ぎた感覚と言わざるを得まい。あるいは、当時の中共がもはや『赤い星』の中共ではなくなっていたということに、スノーはまだ気づいていなかったのかも知れない。

宋慶齡はその特殊な立場からして、1949年以降にスノーが陝北行の支援者として名前を出したところで、何らその地位に影響が及ぶことはなかっただろうが、一方でスノーが『赤い星』時点で仮名しか知らず、ついに終生その名を知ることのできなかった支援者がいる。西安に到着したスノーらの前に現れた英語を操る「王牧師」である。『赤い星』において、潜入を手引きする秘密連絡員として登場するのは、この「王牧師」(Pastor Wang) ただ一人で、スノーは「一時国民党の高官をしていたことがある」この謎の牧師について、「かれの本名を明かすことは今もってできない」と述べていた⁽¹⁵⁸⁾。ただし、秘密めかしたこの記述とはうらはらに、実はスノー自身も「王牧師」の素性を知らず、それが一体だれであったのか、長らく気にかけていたようである。

1960年の訪中のさい、スノーは毛沢東らとの会見で、かの「王牧師」のその後について尋ねている。毛沢東は「王牧師」について全く何も知らなかったが、それを聞いた周恩来が調査を命じ、当時の中国紅十字会党組書記の浦化人が探索のすえ、董健吾なる人物が「王牧師」であることを突きとめたと言われている⁽¹⁵⁹⁾。この調査結果は、その後スノーに伝達されたようで、かれは1968年版に到ってようやく、「かれの本名」の箇所「Wang Hua-jen, a member of the national executive committee of the Chinese Red Cross」という注をつけている (p. 419)。ただし、一見してわかるように、この注記は「王牧師」を探索した人物「浦化人」の情報が「王牧師」に混じり込んだものであった。恐らくは中国側の調査情報がスノーに伝わる過程で、混乱が生じたのであろう⁽¹⁶⁰⁾。つまりは、スノーは恩人たる「王牧師」の本名を誤認したまま、世を去ったということになる。

董健吾 (1891-1970) は、1920年代後半から1930年代半ばにかけ、表向きは人道活動に熱心な牧師を装い、並行して共産党の地下活動を担う秘密黨員であった⁽¹⁶¹⁾。今日では、

中共幹部らの子弟・遺児を収容する児童施設で、一時毛沢東の息子たちを養育していたこと、すなわち赤色革命互済会（モップル）の活動を担っていたことなどが知られている。当時、宋慶齡のもとにも出入りしていた董は、国共交渉を望む宋子文、宋慶齡の要請を受けて1936年はじめに陝北を訪れて中共中央と接触するなど、先の劉鼎などとともに、中共の秘密連絡工作を担当していた。その過程で西安に到着したスノー、ハテムへの接触係を務めたというわけである。スノーらの陝北潜入を成功させたのちも、董健吾は毛沢東の二人の息子（岸英、岸青）を上海からモスクワへ送り出すさいに、その手配をしたり、抗日戦争期には淪陷区の傀儡政權に潜り込んで諜報活動をしたりと、中共の活動を黒子として支え続けたと言われている。ただし、1949年以降は、そうした情報工作の経歴（とりわけ潘漢年の元で活動したという嫌疑）があだとなって迫害を受け、まともな治療も受けられないまま、1970年に病死した。折から1970年に訪中したスノーは、10年前と同様に「王牧師」への面会を求めたというが、結局それはかなわなかった。

「王牧師」の素性（中共秘密党員の董健吾）が中国でおおやけにされたのは、董もスノーも世を去ってかなり経ってから、すなわち董が名誉を回復され、中国で『赤い星』の新訳（董楽山訳）が出版された1979年のことである。実は、新訳を担当した董楽山も1979年のはじめまでは、原書1968年版の注記を鵜呑みにして、王牧師を「後に紅十字会で働いた王化人同志」だと述べていた⁽¹⁶²⁾。だが、その年暮れに新訳が出版されたさいには、当該箇所には替わって「この“王牧師”の本名は董健吾である」というごく短い訳注が附されていた⁽¹⁶³⁾。董が訳文を検討・校訂する過程で、先の浦化人による調査情報が手に入ったものであろう。大きなメディアで言えば、董健吾の存在とその役割（王牧師）は、董の息子たちが新訳『西行漫記』の出版に合わせて『文匯報』に書いた文章によって、広く知られるようになった模様である⁽¹⁶⁴⁾。

1949年以降、スノーの協力者としての功績を顕彰されるどころか、迫害され、時に按摩師をしながら家族を養わざるを得なくなった董健吾の境遇は、そのまま『赤い星』の新中国での奇妙な不遇と重なるものである。新訳『西行漫記』の訳者董楽山は、1979年に「王牧師」が董健吾であることを知り、そのむねを注記したさい、恐らくは「王牧師」の哀れな後半生についても知ったに違いない。かれが新訳を出してのちに、董健吾に関して語った次の言葉は、『赤い星』の再刊や再翻訳、あるいは『赤い星』にかんする研究を許さなかった1980年代以前のゆがんだ体制や文化状況にかんする痛哭として読むことができるだろう。

もし、かれの本〔スノーの『中国の赤い星』〕が早くに中国語に翻訳され、公開出版されていたら、幾人かの同志の不当な境遇は、本当なら避けることができたのだ。ここでは、本に出てくる一人の人物「王牧師」のその後の境遇を例に挙げれば、それで充分だろう。⁽¹⁶⁵⁾

お わ り に

——『赤い星』は毛沢東によって「検閲」されていたという説について

スノーの『赤い星』は、その書物としての影響力の大きさゆえ、さらには同書の描いた対象物がその後に大きく成長し、かつ変貌したため、読者は言うに及ばず、取材や書物にかかわった多くの者の運命を変えた。その読まれ方も、本稿で概述したように、地域により、言語により、そして時期により、大きく異なる。取材協力者については、本稿では書かれざる人々、特に中共関係者を中心に、かれらの果たした役割やかれらが書かれなかった事情について説明を加えた。ただし、スノーの『赤い星』を傑作たらしめるのに陰で功あった者、その貢献を特記しなければならない者はなお多い。

何よりも大きな貢献をしたのは、スノーの当時の伴侶であり、かつ中国報道におけるパートナーでもあったニム・ウェールズこと、ヘレン・フォスター・スノーである。彼女は、スノー帰還後の1937年春に陝北の中共支配地域に入り、以後4カ月にわたって精力的に取材を行った。その取材にもとづくルポルタージュ『中国革命の内部』(*Inside Red China*, 中国語版タイトル『続西行漫記』)や『アリランの歌』(*The Song of Ariran*)の価値については、改めて言うまでもあるまい。『赤い星』執筆に対するウェールズの貢献は、自身の陝北取材中に、スノーに写真をはじめとする追加資料を送ったこと、中共関係者からの修正要求などを取り次いだことである。

『赤い星』の収録写真を例にとれば、1937年の初版では16点中5点が、写真の多い1938年版でいえば、実に61点中12点がウェールズの撮影になるものである。スノーも彼女の取材活動を尊重し、それら写真のキャプションに彼女のクレジットを忘れずに付けている。ウェールズが撮った写真や書簡は、折々に中共の伝書使(王林)、あるいはスノーの陝北潜入成功後に一挙に増えた陝北への西洋人短期訪問者⁽¹⁶⁶⁾(例えば、オーエン・ラティモア〔Owen Lattimore、1937年6月訪問〕)を通して北平のスノーのもとへ届けられた。

1936年10月にスノーが取材を終えて北平にもどってから1937年7月の『赤い星』脱稿まで、西安事変をはじめとして、中共をとりまく政治環境は激変の連続であった。それゆえ、最新の情報が陝北のウェールズからスノーのもとに届けられることによって、スノー

は自らの取材内容のうち、時事問題にかんする中共の見解をアップデートすることができたといえるだろう。『赤い星』初期の版の献辞に「To NYM」とあるのは、そうしたウェールズの貢献への感謝をありのままに表したものにほかならない⁽¹⁶⁷⁾。自身も独立したジャーナリストとして活動したウェールズの生涯については、自伝のほかに研究書型伝記も刊行されている⁽¹⁶⁸⁾ので、もはや改めて紹介するまでもなかろうが、彼女がスノーに取り次いだ中共関係者からの執筆修正の求めについてのみ、説明を補うことにする。それは、中共幹部による取材後の修正要求があったため、スノーは不本意にも筆を曲げたのかというジャーナリストの姿勢にかかわる問題であると同時に、『赤い星』の信憑性に直結する問題だからである。

『中国の赤い星』の原稿が毛沢東らの検閲を受けていたという説を主張しているのは、奇書『マオ——誰も知らなかった毛沢東』で世を騒がせたユン・チアン氏である。同書は、『赤い星』の成り立ちについてこう述べる。

毛沢東は、貴重な情報とまったくの虚構をないまぜにしてスノーに聞かせた。スノーはこれをそっくりそのまま呑み込んで毛沢東と中国共産党指導部を「率直で腹藏なく、気取らず、潔い」と評した。……多くの人がこれに完全にだまされた。毛沢東はさらに用心のため、スノーがその後に書いたものをすべてチェックし、訂正や書き直しの筆を入れた。……『中国の赤い星』の中で、スノーはこうした背景には言及せず、逆に、毛沢東は「わたしに対して一度も検閲をおこなったことがない」と書いている。⁽¹⁶⁹⁾

つまり、スノーは毛沢東のイメージ作戦にコロッとだまされたばかりか、ジャーナリストとしてあるまじき検閲さえも受け入れたのだというわけである⁽¹⁷⁰⁾。さらには、検閲の事実を隠していたというのだから、これが真実であるならば、『赤い星』の価値は、同書執筆の段階にさかのぼって、大いに減ずることになるだろう。

スノーは、確かにインタビュー記録を毛沢東にチェックしてもらっていた。ただし、そうしたチェックがあったことをハッキリと書中で断っていることも指摘しておかねばなるまい⁽¹⁷¹⁾。なぜ、チェックしてもらうのか。本稿第2章第2節で述べたように、スノーの毛沢東へのインタビューは、すべて通訳を介してなされたためである。発言記録の正確を期すため、スノーは書き留めた英文を中国語に翻訳してもらった上で、毛本人に確認してもらっていた。毛が「細かい点に至るまで正確を期す」ために取材メモのチェックを求めたことは、インタビュー内容の多くが共産党の基本政策というセンシティブなものであれば当然だったろうし、またスノーの側も自身が書き留めた内容に間違いがないか、取材期間

中に毛本人に確認してもらうことは、言語をまたがる取材をしている以上、当然のことである。普通はこれを「検閲」とは呼ぶまい⁽¹⁷²⁾。

さらに言えば、『赤い星』のうち、通訳を介した取材記録については、こうしたチェックがあったことは疑いないが、スノー自身の観察記の部分、つまり『赤い星』の半分以上はスノーが北平にもどってから執筆したもので、それら英文原稿を中共側が出版前にチェックすることは、不可能であった。もっとも、毛沢東の側に、書き上がった会見記録を公表前に「検閲」する考えが全くなかったかと言えば、そうとも言えない。すなわち、スノーにたいして、「一、二度毛沢東は、共産党地区滞在中に会見談を書きあげてくれといった」らしいからである。ただし、この申し入れに対してスノーは、そうした形の執筆では、出版社や読者の信頼を得られないとして、北平帰還後の執筆を主張、最終的には毛もそれを認めたという⁽¹⁷³⁾。いわば、スノーはジャーナリストとしての筋を通したのだった。

毛沢東らがスノーの原稿に「訂正や書き直しの筆を入れた」証左として、『マオ』の掲げるもう一つの根拠が、1937年7月26日付けで北平のスノーが延安のウェールズに宛てた書簡である。すなわち、日中戦争の戦火が迫る中、ようやく『赤い星』をほぼ書きあげたスノーは、間際になって内容削除を求める中共関係者からのことづてを伝えてきたウェールズにたいして、「わたしに話したことを取り消したいという人たちにに関するメモは、もうこれ以上送ってこないでほしい。……この調子では、削除ばかりでチャイルド・ハロルドみたいになってしまいそうだ」と不満をもらしたのである⁽¹⁷⁴⁾。この書簡は、ウェールズが後年、延安時期に行った取材記録をまとめて刊行した『延安ノート』に、確かに収められているものである⁽¹⁷⁵⁾。この書簡にも明らかなように、スノーの取材に応じた中共関係者のうち何人かは、事後になってスノーに取材記事の公表を見合わせるよう求めていた。具体的に特定できるのは、周恩来と陳賡である。取材で語った自伝を公表しないよう依頼する二人のことづては、延安のウェールズを通して、原稿執筆中のスノーに伝えられた⁽¹⁷⁶⁾。

なぜ公表を見合わせなければならないのか。すべては1936年夏秋の取材の時点と1937年夏とでは、中国政治、とりわけ国共関係をとりまく状況が一変してしまったことに起因する。周恩来、陳賡はいずれも蒋介石と浅からぬ因縁を持っていた。周恩来は第一次国共合作時期に黄埔軍官学校で政治部主任として蔣校長に親しく仕えたことがあった。また、陳賡も同じ時期に蒋介石に侍衛参謀として仕え、戦場で蔣の命を救ったことがあり、のちの国共抗争時期に逮捕されたものの、かつての功績のせいか、処刑を免れて脱獄できたという奇縁を結んでいた。かれらはスノーのインタビューにさいし、蒋介石の威厳を損なうような揶揄を含めて、比較的自由に語ることができたが、そうした1936年の状況は、西

安事変後に国共合作に向けた交渉が本格化するようになると、大きく変わってしまうことになったのである。1937年春夏ともなれば、共産党幹部による蒋介石や国民党への配慮を欠いたもの言いは、統一戦線を破壊するという意味で、御法度であった。それゆえに周と陳は、一年前に話した内容がそのまま記事になることを何としても防ごうとしたのである。

スノーにこうした要請を伝達するさい、ウェールズはその要請に真剣に対処するよう助言し、スノーも事情をくみ取って削除要求に応じた⁽¹⁷⁷⁾。周恩来について言えば、かつてその年の3月9日にロンドン *Daily Herald* に掲載された周の略伝では、蒋介石は周の影響力の大きさに鑑みて、かれを黄埔軍校から追放することができなかったと書かれていたが、そうした蒋介石がらみの記述は『赤い星』には見えない。一方、蒋介石と命を救い合った陳賡の伝は、本来は『赤い星』の一章を構成する予定だったらしいが、入稿直前に撤回され、結局は1957年に出版されたスノーの取材記録『中共雑記』に収録されるまで、その奇譚は秘せられることとなったのである。

こうした当時の経緯や時代背景を無視し、スノーが中共側関係者の不掲載要請を受け入れたこと一事を取りあげ、『赤い星』は毛に「検閲」されていたとする『マオ』の論法は、同書のほかの記述スタイルと同様、こじつけ以外の何ものでもない。実際には、北平帰還後の1936年12月に、ハテムを通じて毛沢東からインタビュー記録（11月に『チャイナ・ウィークリー・レビュー』に発表したもの）の文言の修正・削除を求められたさい、スノーはそれを無視することすらあったのである⁽¹⁷⁸⁾。この点、スノーは、いったん公表したものは、仮に取材対象から要請があっても修正しないという意味で、むしろジャーナリストの精神を貫き通したと言えるであろう。

他方、『マオ』のそもそもの論評、すなわち要約すれば、「毛沢東は用意周到に都合のよい情報だけをスノーに提供したが、お人好しのアメリカ人ジャーナリストはプロパガンダを真に受け、中共のお先棒を担ぐような『赤い星』を執筆、毛の計略にまんまとはまった結果、多くの人々がだまされた」は、見方によっては、当たっていると言えなくもない。ただし、その見方が受け入れられるのは、毛が正直に話をしなかったのは倫理的に問題だとする価値観の世界においてだけである。歴史学においては、またはジャーナリズムの世界でも、毛が正直だったか、そうでなかったかは、通常問題にならない。取材の過程で取材される側の底意を見抜けず、不正確な、あるいは偏向した報道をしてしまい、後になって「だまされた」と文句を言ったところで、それはジャーナリストの側の未熟を証明するだけで、そのジャーナリストに対して、都合のよい情報だけを提供した側が責められるいわれはないからである。多くの場合、取材された側は、むしろ巧みな広報戦略を発揮したと

して、評価されるであろう。

スノーの再婚相手、ルイス・ウィーラーは後年、日本人ジャーナリストの電話取材に対して、1970年に訪中したスノーが文化大革命をはじめとする中国の状況に戸惑い、『赤い星』で描いた革命の将来が現実によって裏切られたことに「すっかり傷心していた」と答えたらしい⁽¹⁷⁹⁾。スノーが最後の訪中の時点で、中国の現状にある種の不満、幻滅を感じていたこと、またそれを毛沢東に伝えていたことは確かである⁽¹⁸⁰⁾。そうした電話取材を膨らませて書かれたかの日本人ジャーナリストの文章の表題では、「夫、エドガー・スノーは毛沢東に騙されていた」と「スノー未亡人」が「激白」したことになっているのだが、「スノー未亡人」はいざ知らず、スノー自身が、『赤い星』を書いたときの自分は毛沢東や中共にだまされていたのだと認めたことはないはずである。先に述べたように、それを認めることは、『赤い星』の価値はもとより、おのれのジャーナリストとしての生涯も誇りも、全て否定することにはほかならないからである。

では、スノーの『赤い星』を読み、そこに書いてあることは真実だと考えた多くの読者には、「自分は『赤い星』にだまされた」と言ってスノーを責める権利はあるか。およそ書物には本当のことが書いてあるのだ、真実を伝えるのがルポルタージュというものだと信じている人には、そのような奇妙な権利はあるかも知れない。ちょうど、スポーツの試合が終わってから、その試合前に書かれた「対戦展望」を読んで嗤ったり怒ったりする人がいるように。

だが、本稿を通じて、『赤い星』がどのような取材で書かれ、どのように各国で刊行され、さらにはその影響のせいで関係者がこのルポルタージュにかかわったことを名乗り出られなかったという諸々の事実を知った読者は、おのずからスノーと『赤い星』に真実を求めるのとは別の読み方へ向かっていくことだろう。それは、この書物は如何にして書かれたのかを問う読み方であり、かくて本稿は、外界・後世への影響、評価や思入れをいったん棚上げにしたらどうなるかという「はじめに」の課題に、ようやく答えることができるのである。

註

- (1) John K. Fairbank, Introduction, in: Edgar Snow, *Red Star over China*, first revised and enlarged edition, New York: Grove Press, 1968, p. 13; 邦訳: 松岡洋子訳『中国の赤い星』ちくま学芸文庫版、上、筑摩書房、1995年、16-17頁。なお、本稿では *Red Star over China* の原書を引用する場合、版本による異同がない箇所については、特に断らない限り、この1968年版によることにする。

- (2) 加々美光行「解説」、前掲松岡洋子訳『中国の赤い星』ちくま学芸文庫版、下、406頁。
- (3) 主要なもののみを挙げる。『スノー在中国』生活・読書・新知三聯書店、1982年（関係者の記念文集）；鄧力群主編『紀念埃德加・スノー』新華出版社、1984年（関係者の記念文集）；武際良『スノー與中国』中国社会出版社、2005年；丁曉平『埃德加・スノー』中国青年出版社、2013年；呉明「《西行漫記》版本評介」『北京党史研究』1993年第4期；張小鼎「《西行漫記》在中国——《紅星照耀中国》幾個重要中訳本的流伝和影響」『出版史料』2006年第1期。概して言えば、中国のスノー伝や『赤い星』研究は、スノーの英文著作や英語ジャーナリズムでの執筆活動についてあまり注意を払わず、勝手な憶測や出所不明の図版、そして不正確な書誌情報を使い回す傾向がある。このほか、日本語で書かれたスノーの小伝には、江田憲治「エドガー・スノー」（『講座 東アジアの知識人』第5巻、有志舎、2014年）がある。
- (4) John M. Hamilton, *Edgar Snow: A Biography*, Indiana University Press, 1988; Bernard Thomas, *Season of High Adventure: Edgar Snow in China*, University of California Press, 1996.
- (5) スノーは北平帰還直後にロイター通信の取材に応じたようで、その談話記事は、例えば1936年10月30日の *Peking and Tientsin Times* に、“Four Months with China’s Red Army/American Journalist’s Unusual Experience” と題して掲載されている。この記事はその後、スノー自身の取材記事と並行して『救国時報』や『アジア (Asia)』などに転載された。
- (6) Helen Foster Snow (Nym Wales), *My China Years: A Memoir*, William Morrow and Co., 1984, p. 219（邦訳：春名徹・入江曜子訳『中国に賭けた青春：エドガー・スノウとともに』岩波書店、1991年、311頁）。『ライフ』の購入分は75枚、計1000ドルだったという記録や、25枚で1000ドルだったという説もある（それぞれ「スノー陝北之行の自述」『新聞戦線』1979年第6期；Thomas, *Season of High Adventure*, p. 151）。いずれにせよ、破格の金額であることには違いない。
- (7) Edgar Snow, *Journey to the Beginning*, Random House, 1958, p. 187（邦訳：松岡洋子訳『目覚めへの旅』紀伊國屋書店、1963年、163頁）。
- (8) Thomas, *Season of High Adventure*, p. 112, およびスノーのジョンソン駐華大使あて書簡（1937年2月6日——「スノー陝北之行の自述」として『新聞戦線』1979年第6期〔のち前掲『スノー在中国』にも〕収録）。
- (9) グランツ版、ランダム・ハウス版ともに、掲載写真には撮影者のクレジットが付けられている。また、スノーが英語圏の雑誌向けに書いた原稿にしても、その独占掲載権をめぐって雑誌発行元が争うということがあった（Snow, *Journey to the Beginning*, p. 191〔『目覚めへの旅』166頁〕）。
- (10) スノーの写真は、かれの取材協力者であったニム・ウェールズの撮った写真ともども、以下の文書館に収蔵され、公開されている。University of Missouri-Kansas City 文書館（Edgar Snow Papers）、Brigham Young University 文書館（Helen Foster Snow Collection）、Stanford Hoover Institution（Nym Wales Papers）。このほか、スノー、およびスノーの関係者が1949年以後に中国に寄贈した写真もあるが、そちらの方は、閲覧が難しい。
- (11) Publisher’s Note, *Red Star over China*, revised edition, New York: Random House, 1938. このPublisher’s Note によれば、入稿以来途絶えていたスノーと出版社との連絡は、1938年7年ごろようやく回復し、改訂版の出版に到ったのだという。なお、この1938年改訂版は、翌39年にニューヨークの Garden City Publishing Co. から発行されている。
- (12) Thomas, *Season of High Adventure*, pp. 169–181.

- (13) 中国における「トロツキズム」「トロツキスト」については、福本勝清『中国共産党外伝』（蒼蒼社、1994年）155–161頁参照。
- (14) 論争の多いこの魯迅名義の書簡については、長堀祐造『魯迅とトロツキー』（平凡社、2011年）が詳しい。
- (15) Edgar Snow, *Random Notes on Red China, 1936–1945*, Harvard University Press, 1957, pp. 82–85（邦訳：小野田耕三郎・都留信夫訳『中共雑記』未来社、1964年、139–144頁）。
- (16) 「スノーよりニム・ウェールズ宛て書簡（1937年6月9日）」、「ニム・ウェールズよりスノー宛て書簡（1937年6月23日）」（Nym Wales, *My Yenan Notebooks*, Helen F. Snow, 1961, pp. 25–26, 163–164）。
- (17) *Pacific Affairs*, Vol. 11, No. 2, Jun. 1938. なお、同年3月の同誌（Vol. 11, No. 1）には、『赤い星』に関する Edward C. Carter の書評（高く評価するもの）も掲載されている。
- (18) Snow, *Random Notes on Red China, 1936–1945*, pp. 20–22, 73–74.（邦訳：『中共雑記』53–55, 128頁）。なお、シッペはその後共産党地区にとどまり、従軍ジャーナリストとして中国で没した。中国語による記念文集として、漢斯・希伯研究会編『戦闘在中華大地——漢斯・希伯在中国』（山東人民出版社、1990年）がある。
- (19) Snow, *Random Notes on Red China, 1936–1945*, p. 22（邦訳：『中共雑記』57頁）。なお、1939年時点でコミンテルン側は、スノーやスメドレーはトロツキストたちとの関係があるので、信頼しすぎないように警告し、中共も有害な報道活動をするスノーと関係を断つように指示したこともあった（*ВКП(б), Коминтерн и Китай : Документы*, Т.5. (1937–май 1943), Москва, 2007〔漢訳：中共中央党史研究室第一研究部訳『聯共（布）、共産国際與抗日戦争时期的中国共产党（1937–1943.5）』中共党史出版社、2012年〕の第53、73、74、77、101文書参照）。
- (20) Hamilton, *Edgar Snow*, pp. 93, 96; Thomas, *Season of High Adventure*, pp. 179–180. なお、スノーのこの意向は、その後モスクワにも伝達されていたようである（「アメリカ共産党駐コミンテルン代表より Gosizdat〔ソ連・国家出版社〕宛て書簡〔1938年9月以降〕」、Harvey Klehr, et al. eds., *The Soviet World of American Communism*, Yale University Press, 1998, pp. 343–344）。
- (21) 改訂版は、スターリンに関するマイナス評価記述を、このように本文では削除しながらも、索引は修正しなかったため、改訂版の索引（Stalin）に基づいて374頁を見ても、同頁に Stalin の文字はないというような妙なあんばいになっていた。
- (22) 1938年の改訂版でいえば、このほかに148、373、376、378、381、385、441、449頁に同様の方向性の修正が見える。改訂版におけるこうした修正については、Hamilton, *Edgar Snow: A Biography*, pp. 95–96, 308も言及している。
- (23) 例えば、中共支配地域における毛沢東の地位について、その影響は誰よりも大きく、民衆の尊敬を集めているとしつつも、「かれをめぐって英雄崇拜の儀礼は築かれていない。“我々の偉大な指導者”といった文句を使う者はいない」と述べたような箇所（原書1968年版 p. 92、日本語版：前掲松岡洋子訳『中国の赤い星』ちくま学芸文庫版、上、112頁）は、スターリンに対するあてつけにしか見えない。
- (24) H. Isaacs, *Tragedy of the Chinese Revolution*, London: Secker & Warburg, 1938, pp. 436–437. なお、『赤い星』についてのアイザックスの言及は、1938年の初版にのみ見え、以後の版では削除されている。

- (25) 1968年には、イギリスのピクチャー・ゴランツ社からも拡大修訂版（first revised and enlarged edition）が刊行されている。内容はグローヴ・プレス版と全く同一である。なお、その後にペンギン・ブックスから1972年に、いわゆるペリカン・ブックス版（ペーパーバック）の『赤い星』が刊行されており、スノーは同版のために序文を書いているが、附録や補注に若干修正を加えただけで、本体部分については、ほぼ1968年版を踏襲している。
- (26) 前掲 Snow, *Random Notes on Red China, 1936–1945*（邦訳：小野田耕三郎・都留信夫訳『中共雑記』）。
- (27) Edgar Snow, *Journey to the Beginning*, Random House, 1958.（邦訳：松岡洋子訳『目覚めへの旅』紀伊國屋書店、1963年）。
- (28) Edgar Snow, Introduction, *Red Star over China*, New York: Random House, 1944.（邦訳：宇佐美誠次郎訳『中国の赤い星』筑摩書房、1952年、「序」1頁）。
- (29) もっとも、現在形だった記述の一部を過去形にするなどの修正がほどこされており、文面の語りが読者に与える印象は、かなり変わったとは言えるかも知れない。
- (30) 原書1968年版、p. 436.
- (31) 中国史沫特萊・ス特朗・ス諾研究会編『《西行漫記》和我』国際文化出版公司、1991年。
- (32) 『東方雑誌』第34巻第6期（1937年3月）が「根除赤禍声中之赤色人物」と題して、*Life* 所載の写真8枚を転載したのがせいぜいだった。
- (33) 原載は Snow, Interviews with Mao Tse-tung, Communist Leader, *China Weekly Review*, Vol. 78, No. 11, 12, Nov. 11, 14, 1936.
- (34) その一例は、スノ「一個非常的偉人」（『救国時報』第90期、1937年3月25日；原載は Strong Man with a Charmed Life, *Daily Herald*, Mar. 11, 1937）、スノ「少年的長征」（『救国時報』第91期、1937年3月31日；原載は Crusade of Youth, *Daily Herald*, Mar. 9, 1937）。こうした『救国時報』のスノー関連報道については、藍鴻文「巴黎『救国時報』宣伝報道的一大亮点：スノ陝北之行」（『国際新聞界』2005年第4期）が詳しい。
- (35) 「毛施会見記」は、Interviews with Mao Tse-tung, Communist Leader (*China Weekly Review*, Vol. 78, No. 11, 12, Nov. 11, 14, 1936) などいくつかのインタビューを寄せ合わせたものだが、原文を確認できないものも含まれている。「紅党與西北」の原文は、The Reds and the Northwest, *Shanghai Evening Post & Mercury*, Feb. 3–5, 1937. 「紅旗下的中国」は、*Daily Herald* が1936年12月30日から連載した The Truth about Red China に似ているが、やや出入がある。
- (36) それぞれ原文は、The Chinese Red Army, *Asia*, 1936年5月号；When Chinese Reds Move In, *Asia*, 1936年10月号；Within Chinese Red Areas, *Asia*, 1937年1月号。ノーマン・ハンウェル（1909–1941）はカナダ国籍の中国研究者で、1930年代半ばに四川省などで、紅軍撤収後の中共根拠地を訪れ、中共の活動についての報告文をいくつか発表した。
- (37) 「某外国記者」とはアグネス・スメドレー（Agnes Smedley）のこと。原文は1937年3月1日のインタビューをまとめた「中日問題與西安事変——毛沢東與史沫特萊特談話」（『新中華報』338期～、1937年3月16日～。3月に油印のパンフレット『中日問題與西安事変』としても発行されたという——劉小莉『史沫特萊與中国左翼文化』浙江大学出版社、2012年、171頁）。なお、毛沢東は3月10日付けでスノーに書簡とともにこのインタビュー記録を送り、広報を依頼していた（中共中央文献研究室編『毛沢東年譜（修訂本）』上、中央文献出版社、2013年、662頁）。『外国記者西北印象記』の「中日問題與西安事変」は『新中華報』と同内容・同文体なので、延安からスノー経由で提供されたのは、中文版ではなかったかと推測

される。

- (38) 廉臣は陳雲の筆名。原載は『全民月刊』(パリ) 創刊号、1936年3月15日(なお、廉臣「隨軍西行見聞録」は、1936年7月にモスクワで単行本化され、国内にも持ち込まれて流布したとも言われている〔陳宇『誰最早口述長征』解放軍出版社、2006年、65頁；丁曉平『解謎《毛沢東自伝》』中国青年出版社、2008年、37頁〕ので、そうした単行本に拠った可能性もある)。
- (39) 〔美〕ス諾等著、王福時等訳『前西行漫記 原名《外国記者西北印象記》』解放軍文芸出版社、2006年。この復刻版には、「編輯説明」(不正確な記述を含む)と王福時「重版前言」、および関連資料が増補されており、有用である。原版と同内容で、写真も原版と同じものを収録している(原版について、筆者はスタンフォード大学所蔵本を用いて対照した)。ただし、写真についてのキャプション(人物名)を「正確」なものに修正しているので、原版と全く同じではない。
- (40) 『外国記者西北印象記』にかんする研究としては、魏龍泉「《外国記者西北印象記》出版的真相」(『百年潮』2004年第10期)があるが、『印象記』収録の文章の出典については、不十分な記述が目立つ。
- (41) Chinese Communists and World Affairs: An Interview with Mao Tse-tung, *Amerasia*, Vol. 1, No. 6, August 1937.
- (42) Snow, *The Other Side of the River, Red China Today*, New York: Random House, 1962, p. 773 (邦訳: 松岡洋子訳『今日の中国: もう一つの世界』上、筑摩書房、1973年、285-286頁)。なお、同書の別の箇所(英語版 p. 4、邦訳版 xvi 頁)では、「同書〔『中国の赤い星』〕の中国語版は英語版がでる前に出版され、無数の中国人に初めて中国共産主義者に関する信頼すべき事実を提供した」とも述べている。
- (43) 王福時「抗日戦争前夕ス諾幫助出版の一本書」、前掲『ス諾在中国』所収; 同「重版前言」、前掲『前西行漫記 原名《外国記者西北印象記》』所収; 郭達「我和ス諾の幾次相處」、李放「《西北印象記》翻訳始末」、共に前掲『紀念埃德加・ス諾』所収。
- (44) 英文メディアへの発表にも国民党は不快感を示し、スノーに圧力をかけた模様である。そうした圧力に抗議したスノーの南京政府外交部情報司長宛の書簡(1937年2月4日付)が残されている(「ス諾陝北之行自述(続)」『新聞戦線』1987年第5期; Thomas, *Season of High Adventure*, pp. 97-98)。
- (45) 雑誌『文摘』に連載された「毛沢東自伝」(汪衡訳)は、1937年11月に単行本『毛沢東自伝』として上海文摘社より刊行された。以後、スノー取材に由来する、訳者も編集スタイルも様々な毛沢東自伝がおびただしく刊行されることになる。それら無数とも言える版本について精査することは不可能であり、本稿でも省略に従うが、かなりの数の版本を考証したものとしては、丁曉平『解謎《毛沢東自伝》』(中国青年出版社、2008年)が、図録としては、張国柱等『塵封の紅色經典: 早期毛沢東伝記版本図録』(陝西人民出版社、2008年)、程宸編『毛沢東自伝珍稀書影図録』(国家図書館出版社、2009年)があり、参考になる。
- (46) 原文は、1936年11月14日の *China Weekly Review* (Vol. 78, No. 11) に掲載された Interviews with Mao Tse-tung, Communist Leader の“On Japanese Imperialism”の部分である。
- (47) スノーは、自分たちこそが一・二九運動に火をつけたのだと自負している(Snow, *Journey to the Beginning*, pp. 139-143 (邦訳: 松岡洋子訳『目覚めへの旅』123-127頁))。
- (48) 胡愈之「中文重訳本序」、董樂山訳『西行漫記(原名: 紅星照耀中国)』生活・読書・新

- 知三聯書店、1979年（のち『胡愈之文集』第6巻、北京三聯書店、1996年収録）、胡愈之「一次冒險而成功的試驗——1938年“復社”版『西行漫記』翻譯出版紀事」『讀書』1979年第1期（のち前掲『紀念埃德加・斯诺』収録）。
- (49) 胡愈之は当時、すでに共産党員であったと考えられる。
- (50) スノー自身も『西行漫記』に序（1938年1月24日、上海）を寄せ、その中で『西行漫記』は自分とは無関係に復社が出版するものだが、同社が読者自身によって組織される非営利出版機関であるため、自らが所有する資料と版權とを同社に譲渡したい、と述べていた（『西行漫記』復社版、1938年、15頁）。
- (51) 51点の写真のうち、1937年版の原書に掲載されていたのは、わずかに1点のみである。
- (52) 「訳者附記」『西行漫記』復社版、19頁。この附記は無署名だが、前掲『胡愈之文集』は、胡愈之の著作として第4巻に収録する。
- (53) 例えば、本稿注22で指摘した英文版の修正箇所の大半は、『西行漫記』で部分的に修正されている。
- (54) 『西行漫記』復社版、427頁。『西行漫記』に附されたスノーの注記には、このほかにも有用なものがいくつかある。例えば、毛沢東の自伝部分について、本来毛は三人称の語り（つまり伝記体）にして公表するよう要望したが、アメリカの雑誌社の強い希望で一人称の語り（つまり自伝）のままになったこと、それに関しては毛の同意を得ていないことを明かしている（同215頁）。
- (55) 張克明「国民党政府对斯诺著作的查禁」『復旦学報（社会科学版）』1985年第1期。
- (56) 代表的なものとして、前掲呉明「《西行漫記》版本評介」、前掲張小鼎「《西行漫記》在中国——《紅星照耀中国》幾個重要中訳本的流伝和影響」がある。なお、当時上海にいた日本人は、『西行漫記』には二種の訳本（版本）があったと証言している（日森虎雄「前言」『中国共産党研究資料 西行漫記』第1巻、参謀本部、1940年；岩村三千夫「書評『中国の赤い星』」『歴史評論』1947年5月号）が、中国でそのことに言及する研究はない。
- (57) 1960年の復刻・再刊はスノーの訪中に合わせてなされており、「国際友人」に向けた一種のポーズ、あるいはアリバイ作りの意味合いが強い。なお、1949-50年にかけて、上海では『長征25000里』、あるいは『西行漫記』のタイトルで、復社版とはやや内容の異なる訳本が出たようだが、これは政権交代期ゆえに、出版統制が行き届いていなかったためであろう。
- (58) 中共や毛沢東の共産主義運動の中に、ソ連やコミンテルンとは異なる独自性（素朴な民族主義的要素）を見いだす傾向は、スノーにあっては『赤い星』の時点ですでに現れていたとも言える。
- (59) Snow, Will Tito's Heretics Halt Russia?, *Saturday Evening Post*, Dec. 18, 1948; Snow, Will China Become a Russian Satellite?, *Saturday Evening Post*, Apr. 9, 1949. 前者の文章に対しては、『赤い星』を書いて以来、スノーは「ちっとも前に進んでいない」と述べる批判文が発表されている（William Steinhaus, Yugoslavia, China and Snow, *China Weekly Review*, Feb. 19, 1949〔漢訳：淑之訳「南斯拉夫・中国・和斯诺」『世界知識』19巻7期、1949年2月26日〕）。
- (60) Israel Epstein, Fooling People, *China Monthly Review* (Shanghai), Jan. 1952, pp. 38-39.
- (61) スノーが1954年に発表した「毛沢東の恋愛」（松岡洋子訳、『中央公論』1954年7月号）のようなスキャンダラスな文章（むろんスノー自身は暴露モノとして書いたのではなく、毛沢東を生身の人間として描くことが目的であったはず）も、決して中共にとっては好ま

しいものではなかっただろう。なお、この文章の原文（英文）に相当するものは、公表されていない。

- (62) もちろん、毛は隠し立てせず自由に自己の半生や歴史観を語ったわけではない。例えば、富田事件にかんする語りやかれの胸にわだかまっていたに違いない1932-34年時期の不遇・不満、長征途上の張国燾との抗争などについては、言を濁している。
- (63) 人民共和国初期の毛伝としてはこのほかに、蕭三『毛沢東同志的青少年時代』が有名であるが、同書（1950年3月の再版）は、「作者的話」で「ス諾筆記」の自伝に言及する一方、誤りがあると附記している。
- (64) 斎藤朋子「アグネス・スメドレーの墓」（『学生参観団中国に行く』斉了会、1966年、56頁）。なお、この文集は、1966年7-8月の訪中記録として書かれたものである。
- (65) 文学研究者の張小鼎によれば、かれが1970年代後半に公務のために図書館へ『西行漫記』を閲覧に行ったところ、復社版『西行漫記』はヒトラーの『我が闘争』などと同じく、「厳控」（厳重控制）図書に分類されていたという（前掲張小鼎「『西行漫記』在中国——《紅星照耀中国》幾個重要中訳本的流伝和影響」）。文革期に流布した自述については、正確に言えば、『西行漫記』から自述部分だけを抜き出したものではなく、1949年以前に流布した各種の「毛沢東自伝」（注45参照）を翻刻したものである。前掲程宸編『毛沢東自伝珍稀書影図録』114-120頁参照。
- (66) 『人民日報』1970年12月25日。
- (67) 三人の弔電はいずれも『人民日報』1972年2月17日に見える。その後に北京で開催されたスノーの追悼行事などでは、『西行漫記』が「内外に知られた」著書として言及される場合もあった（『人民日報』1972年2月20日）。
- (68) その後、1972年のペリカン・ブックス版を底本とした新訳本が出された（李方准、梁民訳『紅星照耀中国』河北人民出版社、1992年）が、版本の点では貴重なこの新訳は、訳文の面で董訳本に及ばないと評価されているようで、その後に中国で刊行された『赤い星』諸版は、基本的にみな董訳を重刊している。
- (69) 董樂山「ス諾和他的《紅星照耀中国》」、前掲『紀念埃德加・斯諾』。
- (70) 董樂山「我的第一本書」、『董樂山文集』第1巻、河北教育出版社、2001年。
- (71) 董樂山「『西行漫記』新訳本訳後綴語」、前掲『董樂山文集』第1巻。
- (72) スノー生誕100周年を記念して中国で刊行された英中対訳本の『西行漫記／Red Star over China』（外語教学与研究出版社、2005年）は、復社版『西行漫記』によって朱徳伝（「關於朱徳」）を収録する（746頁以降）が、その英語対訳部分（中共中央文献研究室の助言あり）では、1937年のゴランツ版とニム・ウェールズ『中国革命の内部』から対応関係のある文段を探し出してつなぎ合わせる一方、それら英文著作に対応する文段の見つからない箇所については、復社版の中国語から翻訳した英文を配している。
- (73) 「斯人雖逝、風範長存」、前掲『董樂山文集』第1巻、393頁。
- (74) とりわけ毛沢東の自述の部分（「ある共產主義者の来歴」）には、なお不正確な人名同定が目立つ。例えば、北京遊学時（1918-19年）にしばしば無政府主義について語りあった友人（原書ではChu Hsun-pei）を「朱謙之」と訳しているが、これは「区声白」であろう。同様に、1929年前後に毛沢東の紅軍部隊を瓦解させようとしたトロツキスト分子（原書ではLiu En-kung）を「劉恩康」と訳しているが、これは「劉安恭」であろう。このほか、董訳本の収録する写真は、様々な版本からかき集められたもので（出典説明なし）、底本のゴ

ランツ版とは大きく異なる。

- (75) 馬汝鄰「和斯诺相处的日子」、前掲『紀念埃德加・斯诺』。スノーの中国語能力については、漢字1500字を知っていた（すなわち識字のレベルに達していた）という説がある（その一例は、方漢奇「感謝斯诺」『百年斯诺』北京大学出版社、2006年。但し根拠は不明）が、スノーと交流のあった多くの中国人の回想は、その説を支持するものではない。
- (76) Snow, *Red Star over China*, 1968, pp. 106, 130（邦訳：『中国の赤い星』上、ちくま学芸文庫版、134, 170-171頁）；呉黎平「前言」、『毛沢東1936年同斯诺の談話』6-7頁；Snow, *Author's Preface, Random Notes on Red China, 1936-1945*（邦訳：前掲『中共雑記』6頁）、黄華『親歴與見聞——黄華回憶錄』世界知識出版社、2008年、27頁。
- (77) 呉黎平「前言」、『毛沢東1936年同斯诺の談話』7頁。
- (78) このほかでは、自述が林彪に言及する部分（61頁）に注をつけ、かれが後に党の裏切り者となって、1971年にモンゴルで墜落死したことが説明されていたりする。なお、『西行漫記』の人名・地名の誤りを正すこと謳う呉訳本にも、なお不正確な人名同定がある。例えば、1929年前後に毛沢東の紅軍部隊を瓦解させようとしたトロツキスト分子（原書では Liu En-kung、正しくは劉安恭、本稿注74参照）を、強引に「劉敵」（劉は富田事件でAB団とされた人物）と訳している。
- (79) 同前、7-8頁。
- (80) Snow, *Random Notes on Red China, 1936-1945*, p. 47（邦訳：『中共雑記』89頁）。なお、1957年時点の呉の職位は、國務院化学工業部副部長であった。
- (81) 唐宝林「官越做越小的吳亮平」『炎黄春秋』2011年第9期。トロツキストの嫌疑は1937年1月にコミンテルンから発せられたものだった（*ВКП(б), Коминтерн и Китай: Документы*, Т.4. (1931-1937), Москва, 2003〔漢訳：中共中央党史研究室第一研究部訳『聯共（布）、共産國際與中国蘇維埃運動（1931-1937）』中共党史出版社、2007年〕の第394文書）。
- (82) Nym Wales, *My Yenan Notebooks*, Helen F. Snow, 1961, pp. 103, 180-191.
- (83) 雍桂良等『吳亮平伝』中央文献出版社、2009年、160-164頁。
- (84) それぞれ出典は、*The Autobiography of Mao Tse-tung, Asia*, Jul. 1937-; Snow, *Soviet China, New Republic*, No. 1184-1185, Aug. 1937; Snow, *I Went to Red China, Saturday Evening Post*, Nov. 6, 1937で、いずれも抄訳である。なお、『中央公論』掲載のそれら記事に附された写真は、*Life* 由来のものが多い。
- (85) このほかに部外秘資料ではあるが、外務省情報部編刊『中国共産党一九三六年史』（1937年2月刊）、同『一九三七年史』（1938年6月刊）にもスノーの記事の翻訳が掲載されており、同部執筆の「支那共産軍を語る」（『週報』内閣印刷局発行、44号、1937年8月）にも、スノーの記事（*The Reds and the Northwest*）に依拠した記述がある。
- (86) 『日本読書協会会報』については、宮里立士「『日本読書協会会報』と戦時下の海外情報」（『戦時下における外国文献解説——『日本読書協会会報』』別巻、ゆまに書房、2008年）参照。
- (87) 訳者の四方帰一は、『日本読書協会会報』に何冊かの洋書を翻訳している以外、経歴は不明である。筆名のように見えるが、本名を知る手がかりなどはない。なお、1938年8, 9月と言えば、中国語版『西行漫記』が出版されているが、人名同定などで『西行漫記』を参照した形跡はない。
- (88) ギードとは、アンドレ・ジッド（A. Gide）のこと。共産党シンパと見られていたジッドは、1936年のソ連訪問後に発表した『ソヴィエト紀行』で、スターリン体制に反対する姿

勢を鮮明にしたため、左翼党派・文化人から猛烈な非難を受けた。

- (89) 東京大学東洋文化研究所図書室所蔵。
- (90) 宇佐美誠次郎訳『中国の赤い星』筑摩書房、1952年、3頁。
- (91) 日森訳本についての説明は、すべて同書の参謀本部「まえがき（昭和15年11月）」、影佐禎昭「序」、日森虎雄「前言」による。
- (92) このほか、東洋文庫には「『中国の赤い星』をめぐる論争」と題する戦前のタイプ印刷の小冊子（全32頁、発行元や発行期日は記されていないが、「まえがき」が1938年11月執筆であり、そのころの刊行と考えられる）がある。中身は、前述（注17）の雑誌 *Pacific Affairs* に載ったシッペとスノーの応酬、およびカーターの書評を翻訳したものである。
- (93) 『赤い星』（『西行漫記』）に対して書かれた同時代の書評・紹介としては、武藤潔「エドガー・スノーの西行漫記に就て」（『書香』108号、1938年8月）がある。このほかにも、原書を読んで感銘を受けた日本人は少なくない。今は、出獄後の河上肇もその一人だったということを記すにとどめる。河上肇「日記 1938年10月12日条」『河上肇全集』第23巻、岩波書店、1983年、106頁；河上「堀江邑一あて書簡（1938年10月18日）」、同「小島祐馬あて書簡（1938年10月26日）」同前第26巻、1984年、206-212頁。
- (94) ちなみに、中国通作家として知られている村松梢風は、「宋美齡——続南京夢物語」（『中央公論』臨時増刊号、1937年12月）で毛沢東自叙伝の翻訳に言及して、次のように述べていた。「過日日本の二大雑誌〔『中央公論』『改造』〕に載った毛沢東の自伝を読むと……、かういふことは心ある者が読めば大マヤカシであることは直ちに看破出来る。……要するに朱徳にしても、毛沢東にしても、正直な一部の日本人が想像するやうな立派な人間でも傑物でもない。……朱徳、毛沢東の輩は、共産主義を汚すところの極めて悪質の土匪である。……ただ我が国の識者が、真相を滅却して毛沢東ごとき奸悪の自伝を読んで万一にも誤まれることの影響を恐れる次第である」。
- (95) 「訳者あとがき」、宇佐美誠次郎訳『中国の赤い星』筑摩書房、1952年、371頁。下巻差し止めに伴い、上巻も発禁となつたらしい（「学問形成と中国認識（野澤豊、安藤実を聞き手とした宇佐美誠次郎の語り）」、花原二郎ほか編『学問の人 宇佐美誠次郎』青木書店、2000年、69頁）。
- (96) 削除前後の書評文を対照させたものが、『歴史評論』（155号、1963年）に資料として掲載されている。
- (97) 前掲「学問形成と中国認識」『学問の人 宇佐美誠次郎』69頁。
- (98) 前掲「学問形成と中国認識」『学問の人 宇佐美誠次郎』70頁。
- (99) 松岡洋子「訳者あとがき（1972年12月）」、『中国の赤い星（増補改訂版）』「エドガー・スノー著作集」第2巻、筑摩書房、1972年、422頁。
- (100) 同前、および「訳者あとがき」、宇佐美誠次郎訳『中国の赤い星』筑摩書房、1952年、369頁。宇佐美が利用した『西行漫記』は、波多野乾一が提供したものだった。
- (101) 宇佐美はランダム・ハウス版の大きな改訂を1939年のこと（正しくは1938年）としている。
- (102) 松岡洋子「訳者あとがき（1975年9月）」、『中国の赤い星（増補決定版）』筑摩書房、1975年、424頁。
- (103) П. Миф, 15 лет героической борьбы: К 15-летию Коммунистической партии Китая (июль 1921-июль 1936), М., 1936. 同じくモスクワで刊行された漢訳版（米夫『英勇奮闘的十五年』）、

漢訳版をもとにした邦訳版（ミフ著『中国共産党十五年史』〔中支調査資料第541号〕、在上海大日本帝国大使館事務所、1943年）もある。

- (104) ① Г. Эренбург, «За рубежом», ноябрь 1934. № 31; ② Х., Мао Цзе-дун – вождь китайского трудового народа, «Коммунистический Интернационал» 1935, № 33–34; ③ А. Хамадан, Вождь китайского народа – Мао Цзе-дун, «Правда» 1935. 13 декабря. ①は現在確認される限り、外国で発表された最も早い毛沢東個人伝であり、解説を附した漢訳がある（石川禎浩訳注「蘇聯《国外》雑誌刊登の毛沢東略伝」『中共党史研究』2013年第12期）。②は『コミュニスト・インターナショナル』の独語版、英語版、中国語版にも掲載されているが、①を参照した形跡がある。漢訳は『蘇聯《真理報》有関中国革命的文献資料選輯』第2輯、四川省社会科学出版社、1986年、532–537頁。③は②と同じ著者によるもので、②を簡略化したもの、漢訳は蘇揚編『中国出了個毛沢東』解放軍出版社、1991年、383–391頁。
- (105) コミンテルンの支援のもと、モスクワで編纂、刊行された中共党史関連の図書、資料集（中国語、ロシア語など）は、これまで中国の党史研究では、全くと言ってよいほど見落とされてきたものだが、スノーの『赤い星』以前の中共や毛沢東のイメージを探る上では、極めて重要なものである。これについては別稿を準備しているので、今は論じない。
- (106) スノーが既往の中共関連情報として『赤い星』で引用している（つまり同書執筆時までにスノーが手に入れることのできた）文書は、このたぐいのものだった。二、三例を挙げると、*China at Bay*, London: Modern Books, Jan. 1936（コミンテルン発行の英文パンフレットで、*Communist International*, Vol. 13, Special Number, Feb. 1936を改めてパンフレット化したもの、Heroic Trek〔施平「英勇的西征」〕や毛沢東、朱徳、方志敏の伝記〔前述のハマダン執筆のもの〕を含む）；*Red China: being the report on the progress and achievements of the Chinese soviet republic / delivered by the president, Mao Tse-tung, At the second Chinese national soviet congress, at Juikin, Kiangsi, January 22, 1934*, London: M. Lawrence Ltd., Sep. 1934（1934年1月の第2回全国ソヴィエト代表大会の関連文献集）。
- (107) 長征を経た陝北の中共中央とモスクワとの無線交信が再開されるのは1936年6月半ばで、当時スノーはすでに中共から入境・取材の許諾を得て、西安から陝北の中共地区に入る機をうかがっているところだった。なお、Peter Randは中共が外国人ジャーナリストを受け入れるよう、モスクワから指示されていたとする（*China Hands: The Adventures and Ordeals of the American Journalists Who Joined Forces with the Great Chinese Revolution*, New York: Simon & Schuster, 1995, p. 157）が、根拠を示していない。
- (108) Эдгар Сноу, Мао Цзе-дун, «За рубежом», 1937, № 35, стр. 800, 814. ロシア国外では、ほとんど見ることのできないこの雑誌の探索に当たっては、ロシア科学アカデミー極東研究所のソトニコワ（Irina Sotnikova）教授の協力を得た。記して謝意を表す。
- (109) 毛沢東の自述部分は、『国外』とほぼ同じ時期に、雑誌『国際文学』にも「我が半生」（Моя жизнь, «Интернациональная литература», 1937, № 11–12）として、掲載されているらしい（A. Pantsov, S. Levine, *Mao: the Real Story*, New York: Simon & Schuster, 2012, pp. 324, 632）。
- (110) Э. Сноу, *Героический народ Китая*, М. 1938. なお、筆者はこのロシア語版を目撃し得ていない。以下、本稿の同書に関する記述は、以下の研究による。Thomas, *Season of High Adventure*, pp. 174, 183, 364, 366 ; A. Pantsov, How Stalin Helped Mao Zedong Become the Leader, *Issue & Studies*, Vol. 41, No. 3, 2005. p. 189.
- (111) Snow, *Random Notes on Red China, 1936–1945*, p. 3（邦訳：前掲『中共雑記』26頁）。

- (112) スノーが『赤い星』で、中共根拠地での毛の敬愛のされ方として——恐らくはスターリンを念頭において——「毛の名前が中国人民の同義語として使われているのを聞いたことがない」と述べた（原書1968年版 p. 92、日本語版ちくま学芸文庫版、上112-113頁）ことを想起すると、毛を「中国人民の息子」とする言い回しは、一種の皮肉に見える。
- (113) Thomas, *Season of High Adventure*, p. 183.
- (114) 「メアリー・リード (Mary Reed) よりアメリカ共産党駐コミンテルン代表宛て書簡 (1938年9月6日)」、「アメリカ共産党駐コミンテルン代表より Gosizdat [国家出版社] 宛て書簡 (1938年9月6日以降)」(Harvey Klehr, et al. eds., *The Soviet World of American Communism*, Yale University Press, 1998, pp. 342-344)。
- (115) 例えば、毛沢東の生年を初めて1893年としたのも『中国の赤い星』である。ソ連・コミンテルンは、それまで毛沢東の生年を把握していなかった。
- (116) Mao Цзэдун, *Биографический очерк*, М., ОГИЗ-Госполитиздат, 1939. 前掲丁曉平『解謎《毛沢東自伝》』135-137頁に同書の書影が掲げられている。
- (117) Mao Цзэдун, *Биографический очерк*, стр.16.
- (118) Чуан Сюн, Mao Цзе-дун, «Коммунистический Интернационал» 1939, № 6. 漢訳は、前掲蘇揚編『中国出了個毛沢東』392-398頁。
- (119) Snow, *Journey to the Beginning*, p. 169 (邦訳：松岡洋子訳『目覚めへの旅』148頁)。
- (120) A. Pantsov, How Stalin Helped Mao Zedong Become the Leader, *Issue & Studies*, vol. 41, no. 3, 2005；欧陽奇「論共産国際対毛沢東及其思想的認識軌迹」『中共党史研究』2012年第3期、王新生「中央蘇区時期共産国際與毛沢東的關係」『中国延安幹部学院学報』2013年第6期。
- (121) 国民党との統一戦線にかんしても、取材にさいしてスノーが蒋介石の姿勢に疑義を呈したのに対し、毛がそれに同意するというやりとりがあったらしい (Thomas, *Season of High Adventure*, p. 144)。
- (122) 「尼姆・威爾斯談《西行漫記》及其他」『読書』1979年第5期；海倫・福斯特・斯諾「斯諾是怎样去陕北的」『新聞戦線』1987年第1期。前者の文章は、1979年4月にウェールズが、かつて自分たちの助手をつとめ、『外国記者西北印象記』の翻訳、編集にもたずさわった王福時にあてた書簡を翻訳したものである。後者の文章は、1983年6月にウェールズが劉立群（中国のスノー研究者）に送った書簡を翻訳したものである。
- (123) Snow, *The Other Side of the River: Red China Today*, pp. 261-265 (邦訳：松岡洋子訳『今日の中国：もう一つの世界』上、176-184頁)。『赤い星』では、1968年版に付けられた人名録で言及された。
- (124) 「“我熱愛中国！”——馬海德談斯諾」『新聞戦線』1982年第2期；Ma Haide, Fifty Years of Medicine, *Beijing Review*, Nov. 17, 1984. これより先、中国刊行の英語誌に載ったスノー略伝も、スノーの同行者としてハテムに言及している (Chiang Shan, Edgar Snow and His “Red Star Over China”, *Peking Review*, Apr. 21, 1978)。
- (125) 吳殿堯「劉鼎興『西行漫記』」『百年潮』2013年第7期；吳殿堯『劉鼎伝』中央文献出版社、2012年、120、125、505頁。
- (126) Snow, *The Other Side of the River: Red China Today*, pp. 261-265 (邦訳：松岡洋子訳『今日の中国：もう一つの世界』上、176-184頁)。
- (127) 以下特に断らない限り、ハテムの証言、回想は、Edgar Porter, *The People's Doctor: George Hatem and China's Revolution*, University of Hawaii Press, 1997, pp. 56-61 (邦訳：菅田絢子ほ

- か訳『毛沢東の同志馬海德先生 アメリカ人医師ジョージ・ハテム』海竜社、2010年、122-131頁）による。なお、邦訳書にはいくつか不可解な訳の省略がある。
- (128) Ma Haide, *Fifty Years of Medicine, Beijing Review*, Nov. 17, 1984, p. 18.
- (129) Porter, *The People's Doctor: George Hatem and China's Revolution*, pp. 58-59（邦訳：『毛沢東の同志馬海德先生 アメリカ人医師ジョージ・ハテム』125頁）。もっとも、ハテムの言う秘密文書（コミンテルン第7回大会文書）は、かれが運ぶより早く、陝北の中共のもとに届いていた。
- (130) E. Grey Dimond, *Inside China Today: A Western View*, Norton, 1983, p. 136.
- (131) ハテムからスノーに送られた書簡や日記などの資料の一部は、Porter, *The People's Doctor: George Hatem and China's Revolution*, pp. 86-97（邦訳177-193頁）；Snow, *Random Notes on Red China, 1936-1945*, pp. 10-22, 73-74.（邦訳：『中共雑記』21-22頁）に収録されている。
- (132) ニム・ウェールズは、スノーの陝北潜入の経緯を説明するさいに、1936年2-3月のDavid Yu（すなわち俞啓威、のちに黄敬と改名）からの書簡数点を提示している（海倫・福斯特・スノー「スノーは怎樣去陝北的」『新聞戦線』1987年第1期）が、それら（天津の中共組織の仲介を暗示するもの）は失敗した一度目の潜入に関するものだろう。なお、ウェールズもスノーの最初の潜入が失敗したことには言及していない。
- (133) 強いて言えば、スノーらが西安郊外に出かけて、鄧発に出くわした時、かれらに同行していた「東北軍将校の軍服をまとった青年」（1968年版、p. 52）が劉鼎のことなのかも知れない。このほかでは、1957年刊の『中共雑記』所収の苗剣英の西安事変にかんする回想に劉鼎の名が、また1962年刊の『今日の中国：もう一つの世界』に、ハテムに影響を与えた共産主義者としてLiu Tingの名が、それぞれ出てくる（Snow, *Random Notes on Red China, 1936-1945*, pp. 8-9〔邦訳：『中共雑記』33-34頁〕；Snow, *The Other Side of the River: Red China Today*, pp. 263-264〔邦訳：『今日の中国：もう一つの世界』上、179頁〕）。ただし、記述は非常に簡単である。
- (134) 呉殿堯「劉鼎與『西行漫記』」『百年潮』2013年第7期。
- (135) スノーはまず上海へもどり、4-5月に魯迅などと面会し、その後5月19日にいったん北平に帰ったようである。この時の足どりについては、張小鼎「一次長達“幾小時”的重要会晤考」（『魯迅研究動態』1987年第6期参照）。なお、宋慶齡は自身がスノーの陝北潜入に具体的にどのように関わったかを明らかにするような文章を残していない。
- (136) 呉殿堯『劉鼎伝』中央文献出版社、2012年、249頁、前掲呉殿堯「劉鼎與『西行漫記』」、金冲及主編『周恩來伝』第1巻、中央文献出版社、1998年、381頁。
- (137) 程中原『張聞天伝（修訂版）』当代中国出版社、2006年、187-188頁。なお、この会議記録の意義に初めて注意を向けたのは、程中原「在斯諾“西行”之前」（『党的文献』1992年第1期）ではないかと思われる。
- (138) 質問状に対応する毛のインタビューは1936年7月15日に行われ、*Amerasia* 1937年8月号に載る一方、前出『外国記者西北印象記』にも掲載された（本稿注35参照）。
- (139) 前掲『劉鼎伝』249頁、史紀辛「対魯迅先生送礼物慰問中共領導人一事考」『北京党史』2001年第5期。当時、延安は中共ではなく、東北軍の支配下にあった。スノーらは西安から延安まで東北軍の自動車で移動し、そこから中共区へ潜入したのである。
- (140) スノーは『赤い星』の中で、ソ区に入ったばかりの自分に周恩来が92日間の取材スケジュールを提案してくれたことに驚嘆している（1968年版p. 71、ちくま文芸文庫版、上、

- 83頁)が、それくらいの長さの取材は、スノー自身が予め計画・申請していたわけである。
- (141) この書簡は、上海での様々な工作を任されて中共中央から派遣された馮の最初の報告で、魯迅をはじめとする文化界への働きかけや情報工作をはじめ、極めて重要な情報が盛り込まれているが、現在でも全文は公表されていない。内容の一部は、魯迅研究の以下の関連論文に引用されている。程中原「關於馮雪峰1936-37年在上海情況的新史料」『新文学史料』1992年第4期、史紀辛「対魯迅先生送礼物慰問中共領導人一事考」『北京党史』2001年第5期、史紀辛「再談魯迅與中国共产党關係的一則史實」『魯迅研究月刊』2001年第6期、史紀辛「魯迅托送金華火腿慰問中共領導人史實再考」『魯迅研究月刊』2003年第10期など。
- (142) 童小鵬『軍中日記』解放軍出版社、1986年、219-222頁。
- (143) 前掲『劉鼎伝』472頁。
- (144) 劉鼎がスノーらの陝北入りを支援したという事実を積極的に公言しなかった理由は、あるいはその時期に劉が担当していた人員・物資移送にまつわる隠匿疑惑に関係しているのかも知れない。すなわち、1936年に馮雪峰がスノー一行に托した荷物として、魯迅の名義で贈られた毛沢東宛のハム(金華火腿)があったのに、なぜか陝北に届かなかったという「事件」があるが、それは劉がその贈り物を西安に留め置いたせいだと言われているのである(史紀辛「魯迅托送金華火腿慰問中共領導人史實再考」『魯迅研究月刊』2003年第10期に引く馮雪峰の中共中央宛て報告(1936年9月12日)——この報告で馮は、輸送工作にあたる劉鼎が勝手に物資を留め置いていることを指摘し、魯迅の贈ったハムもそのせいで届かなかったと非難している)。魯迅が中共指導者にハムを贈ったか否かは、これまで魯迅と中共の距離を測る重大な問題とされてきたのであった。スノーらを手引きしたことを振り返れば、この疑惑にも何らかの弁明をせざるを得ないから、劉がそれを嫌ったということが推測できる。
- (145) 前掲『劉鼎伝』505頁。
- (146) 1968年版の注釈部分には2カ所宋慶齡の名が見え、中国人略伝の中にも宋慶齡の伝が立っているが、非常に簡単なものである。
- (147) Snow, *Journey to the Beginning*, p. 152 (邦訳:『目覚めへの旅』134頁)。
- (148) *Ibid.*, pp. 82-84 (同前72-75頁)。
- (149) *Ibid.*, p. 84 (同前75頁)。
- (150) *Ibid.*, pp. 92, 94 (同前82, 84頁)。
- (151) 「宋慶齡復海倫・福斯特・斯諾(1959年)」、「宋慶齡復詹姆斯・貝特蘭〔James Bertram〕(1959年)」、ともに原書簡は英語(上海宋慶齡故居紀念館編訳『宋慶齡来往書信選集』上海人民出版社、1995年、461, 473頁)。
- (152) 前掲『宋慶齡来往書信選集』474頁の編者注、および鄭培燕「宋慶齡糾正斯諾臆想未果」『世紀』2011年第2期。
- (153) 例えば、孫文が生前にキリスト教式の葬礼を望み、家族葬ではその通りに行われたことは、今日では史実としてほぼ認められているが、宋慶齡生前の中国ではそのような孫文像はタブーであった。
- (154) Snow, *Random Notes on Red China, 1936-1945*, pp. 1-2 (邦訳:『中共雑記』22-23頁)。なお、この箇所では、関連する情報を寄せた人物(ハテム)についても、「まだ名を明かすわけにはいかない」とされている。
- (155) 楊奎松『西安事変新探』江蘇人民出版社、2006年、351-360頁。

- (156) Snow, *Journey to the Beginning*, p. 94 (邦訳:『目覚めへの旅』84頁)。
- (157) Thomas, *Season of High Adventure*, p. 287.
- (158) 英語原書1938年版、p. 17.
- (159) 周蕙「董健吾」『中共党史人物伝』第68巻、中央文献出版社、2000年、408頁。
- (160) 1968年版を底本にした日本語版(松岡訳、1972年)は、この注釈箇所を「誠実な牧師である王華人(音訳)は中国紅十字会の全国執行委員会委員」とそのまま訳していたが、1975年の増補決定版では、「王化人[音訳、浦化人だと思う]」という補注を付けている(324頁、ちくま学芸文庫版、上、354頁)。恐らくは、中国紅十字会の幹部に浦化人がいることを調べ、それと同一視したのであろう。
- (161) 以下、董健吾の経歴に関する記述は、特に断らない限り、前掲周蕙「董健吾」による。
- (162) 「斯諾在西北蘇区的撮影採訪活動(1979年2月執筆)」、前掲『董樂山文集』第2巻、76頁。
- (163) 前掲董樂山訳『西行漫記』16頁。
- (164) 董惠芳等「写在『西行漫記』重印出版的時候」『文匯報』1980年2月26日(前掲『紀念埃德加・斯諾』所収)。
- (165) 「《西行漫記》新訳本訳後綴語」、前掲『董樂山文集』第1巻。この文章は本来1980年ごろに執筆して香港『大公報』に寄稿したものだが、掲載前に原稿が行方不明になったため、後に改めて書き直したものだという(同書274-275頁)。
- (166) 1937年に陝北の中共統治区を正規、非正規に訪れた内外のジャーナリスト、研究者だけでも、スメドレー、范長江、リーフ(Earl Leaf、UP通信天津特派員)、キーン(Victor Keene、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』特派員)、ラティモア、バートラム(James Bertram)など多数に上る。それらの人々の情報については、以下を参照。Margaret Stanley, *Foreigners in Areas of China Under Communist Jurisdiction Before 1949*, Center for East Asian Studies, University of Kansas, 1987.
- (167) 「To NYM」の献辞が見えるのは1944年版までで、以後の版にこの献辞は見えない。スノーが1949年にウェールズと離婚し、ルイス・ウィーラー(Lois Wheeler)と再婚したことが影響しているのかも知れない。
- (168) 自伝としてはHelen Foster Snow(Nym Wales), *My China Years: A Memoir*, William Morrow and Co., 1984(邦訳:春名徹・入江曜子訳『中国に賭けた青春:エドガー・スノウとともに』岩波書店、1991年)があり、伝記としては、Kelly Ann Long, *Helen Foster Snow: an American Woman in Revolutionary China*, University Press of Colorado, 2006. がある。
- (169) Jung Chang and Jon Halliday, *Mao: The Unknown Story*, London: Jonathan Cape, 2005, p. 190(邦訳:土屋京子訳『マオ——誰も知らなかった毛沢東』上、講談社、2005年、327-328頁)。「わたしに対して一度も検閲をおこなったことがない」のくだりは、原書1968年版では96頁(日本語訳のちくま文庫版では上巻120頁)に見え、それ以前の版でも変わらない。なお、『マオ』はAnne-Marie Brady, *Making the Foreign Serve China: Managing Foreigners in the People's Republic*, Rowman & Littlefield Publishers, 2003, pp. 43-50の見解を敷衍して「検閲説」を展開しているようである。
- (170) こうした『マオ』の解釈に便乗する評論に、池原麻里子「『中国の赤い星』スノー未亡人の激白/夫、エドガー・スノーは毛沢東に騙されていた」(『諸君』2006年6月号)がある。
- (171) 原書1968年版106頁(日本語訳:ちくま文庫版、上巻134頁)。なお、正確を期すために毛沢東にインタビュー記録をチェックしてもらったことは、1936年11月にインタビュー記

録を『チャイナ・ウィークリー・レビュー』に最初に発表した時点で、すでに表明されていた。

- (172) インタビュー取材と原稿確認、検閲の問題については、Christopher Silvester ed., *The Penguin Book of Interviews: An Anthology from 1859 to the Present Day*, Penguin Books, 1993 (邦訳：新庄哲夫訳『インタヴューズ』文藝春秋、1998年)の「序」参照。
- (173) Snow, Author's Preface, *Random Notes on Red China, 1936-1945* (邦訳：前掲『中共雑記』8頁)。
- (174) Wales, *My Yenan Notebooks*, p. 166. 文中の「チャイルド・ハロルド」とはバイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』(Childe Harold's Pilgrimage)を指すものと見られる。インタビュー部分がどんどん削られると、スノー自身の旅行記ばかりになってしまうことを皮肉ったものであろう。
- (175) Wales, *My Yenan Notebooks*, p. 166. ただし、ウェールズはこの書簡にかんして、実際には延安にいる自分には届かなかったし、読んだ覚えもないという注を附している。
- (176) 周恩来からの要請は1937年6月18日付けの書簡(ウェールズからスノー宛て)で、陳賡からの要請は1937年5月21日、6月23日付けの書簡(ウェールズからスノー宛て)で、それぞれ伝達されている(Wales, *My Yenan Notebooks*, pp. 21-22, 162-164)。
- (177) 前引の1937年7月26日付けの書簡で、スノーはウェールズにたいし、周と陳の求めに応じるので、そのむねを二人に告げて安心してもらうよう伝えている。また周恩来は、スノーが中共の機密事項(軍事や情報通信)を暴露する報道をしているとウェールズを通じて抗議している(Wales, *My Yenan Notebooks*, p. 164)が、スノーはそんなことはしていないし、するつもりもないと回答している(同 p. 166)。
- なお、後年スノーは中共関係者が取材の「ノートの審査・削除を要求してきたことは一度もない。周恩来から蒋介石について述べたことは印刷しないでほしいといってきたのが、思い出せる唯一のケースであった」(Snow, Author's Preface, *Random Notes on Red China, 1936-1945*, p. 56 [『中共雑記』序言6-9頁、本文103頁])と述べているが、陳賡のことは忘れているようである。周恩来からの要請については、Snow, *Journey to the Beginning*, p. 158(『目覚めへの旅』139頁)にも言及がある。
- (178) ハテムが1936年12月3日付けの書簡で伝達した毛の修正要求は、Porter, *The People's Doctor: George Hatem and China's Revolution*, pp. 90-91に、スノーがそれに応じなかったことは、同書 p. 315の注42、及び Hamilton, *Edgar Snow*, p. 95で指摘されている。また、本稿注54で示したように、毛沢東自述の文体についても、スノーは毛の要求を受け入れなかった。
- (179) 池原麻里子「『中国の赤い星』スノー未亡人の激白／夫、エドガー・スノーは毛沢東に騙されていた」『諸君』2006年6月号。なお、譚璐美「毛沢東とエドガー・スノー」(『外交』24号、2014年)も、この文章に便乗して『中国の赤い星』はスノーの生涯の悔いとなったとする。
- (180) Thomas, *Season of High Adventure*, pp. 320-340.